る。

自ら見はす者は明ならず、自ら是とする者は彰はれず、自ら伐る者は行はれず、自ら矜る者は長からず。

といふ語がよく此意を示して居る。

聖を絶ち智を棄つれば民の利百倍す。仁を絶ち義を棄つれば民孝慈に復す。功を絶ち利を棄つれば盜賊有ること無し。

といふも、畢章仁義を表に飾つて私を謀るものゝ多い世間に對する一大痛棒と稱すべきである。人は天地を範とすべきものである。凡ての物は天に覆はれ地に載せられて、各生育を遂げて行くのであるが、天地は決して凡ての物を私せず、その有るが儘に任せて置くのである。

天は長にして地は久し、天地の長にして且久しき所以は、其の自ら生ぜざるを以てなり。

3.028

老子の三寶

とある。自ら生ぜざるといふは『自ら物を生ぜりとて誇示せざる』の義である。

禍は足るを知らざるより大なるなく、咎は得んことを欲するより大なるなし。故に足ることを知るの足るは常に足る。

といふは卽ち人々の心を安んずべき所を指示したものである。殊に注意すべきは老子の三寶の說であらう。

我に三寶あり、持して之を保つ。一に曰く慈。二に曰く儉。三に曰く敢て天下の先とならず。慈なるが故に能く勇なり。儉なるが故に能く廣し。敢て天下の先とならず、故に能く成器の長たり。今慈をすてゝ勇ならんとし。儉をすてゝ廣からんとし、後となるをすてゝ先とならんとす死せん。

『成器の長』とは凡ての形ある者の長といふ義である。此の一段の語は殊

に今の如き忙しい世に立つ者に取つては、最も有益なる教訓と思はれる。

而して、

天の道は利して害せず、聖人の道は爲して爭はず。

といふは、天の道と人の道と一致すべき所以を簡にして能く示して居る。

若し人々が小い眼前の利害得失ばかりを考へて相爭ふことを止めれば、世の中は極めて平穩靜謐になるであらう。されば老子は

民を愚にせんとす

古の善く道を爲す者は以て民を明にせんとするに非ず、特に以て之を愚にせんとす。民の治め難きは其の智多きを以てなり。故に智を以て國を治むるは國の賊なり。智を以て國を治めざるは國の福なり。

といふのである。民を愚にするといふは、要するに利害の打算にのみ敏感になるの弊を矯めやうとするのである。

道を失ひて而して後に德あり、德を失ひて而して後に仁あり。仁を失ひて而して後に義あり、義を失ひて而して後に禮あり。夫れ禮は忠信の薄にして亂の首なり。

といふは極端の言のやうであるが、其の誠がなくて强いて外貌を飾るの弊を最も痛切に指摘して居る。利を求むる心と名を求むる心とは、つまり同じ所から出て居るものである。宋の司馬光が『諫院題名記』を作つて、諫官の責の大なることを述べ、

名利の念

是官に居る者は當に其志を大にし其細を捨て、其急なるを先にし其緩なるを後にし、專ら國家に利して身の爲に謀らざるべし。彼の名に汲々たる者は猶ほ利に汲々たるが如し。其間相去ること豈に遠からんや。

といつて居るのは眞に適切なる言である。名を求むるも利を求むるも、求むるといふ念は卽ち一である。名譽を重んぜよとか、名を惜めとかいふ教へは吾が國の武士の間などにも專ら唱へられたものであるが、それは人に

笑はれるやうな卑しい行ひをするなといふやうに、實行上に重きを置いて説かれて初めて意義を有するのである。若し其實を努めずして其名に汲々たるものならば、利を求めて一切の事を忘れるものと相去ること遠からぬ者である。

己に在る所を努めずして、その報を他に求めることになれば、いつ迄も滿足は得られぬに極つて居る。何故ならば求むる所の念は際限もなく高まつて行くが、之に應ずべき物には限りがあるからである。求めて得ざる間は煩悶し憂惱し、求めたものゝ一部分でも得た時には、又之を失はんことを恐れて安き心がないならば、生涯殆んど無意義に近いではないか。耶蘇がその弟子に向つて、

風に動さるゝ葦

爾等何を見んとて野に出しや、風に動さるゝ葦なるか。

といつたのは如何にも面白い語である。外に向つてのみ求めて居るものは、常に四圍の事情によつて動されて居る。宛も風の前に立つ葦の如きものである。また耶蘇は

人は二人の主に事ふること能はず。そは此を惡み彼をいつくしみ、此を親み彼を疎むべければなり。爾等神と財とに兼ね事ふること能はず。是故に我爾等に告げん、生命の爲に何を食ひ何を飲み、また身體の爲に何を衣んとおもひわづらふこと勿れ。生命は糧より優り、身體は衣よりも優れるものならずや。爾等天空の鳥を見よ、稼くことなく穡ることをせず、倉に蓄ふることなし。然るに爾等の天の父は之を養ひ給へり。爾等之より大に勝るゝ者ならずや。

と戒めた。今日の如く世の中が渡り惡くなつて來ては、鳥の如くに積み蓄へずして天の父に任せて置くといふことも出來ぬけれども、『生命は糧より優り身體は衣より優れるもの』といふことを深く考へるのは、何人にも最

も肝要な事である。糧と衣とのみに心を惹かれて、それよりも大切なものを忘れてはならぬ。

貧しいのが好きだといふ人は無い、賤しいのが望ましいといふ人はない。罵られるよりも稱讃される方が宜いに極つてゐる。『金なんぞ無い方がいゝ』といふは強いて奇矯の言を爲すものである。孔子は『不義にして富み且貴きは我に於て浮雲の如し』といつたが、富み且貴きを厭ふのではない、不義にして富み且貴きを求めぬのである。されば又『富にして求む可くんば執鞭の士と雖も吾亦た之を爲さん。若し求む可からずんば、吾が好む所に從はん』ともいつて居る。名利の念を去れといふは、貧しきを喜びとせよといふやうな不自然なことをいふのではない。己の事に全力を盡すことを忘れて、徒らに報を他に求めんとするの愚を諭さんとするのである。要するに肝心なのは輕重の辨別である。自分の爲すべき事に全力を注

輕重の辨別

ぎ得たことに悅びを感ずることが出來ぬならば、眞の滿足はないといふことを先づ考へて置かなければならぬのである。それを忘れて外にのみ求めて居るので、『ほしい』『惜い』の二つの念に挾まれて、思慮も分別もメチャ〳〵にされてしまふのである。老子が

五色は人の目をして盲せしむ、五音は人の耳をして聾せしむ、五味は人の口をして爽はしむ。馳騁田獵は人の心に狂を發せしむ。得難きの貨は人の行をして妨げしむ。是を以て聖人は腹を爲して目を爲さず。

といつたのは此處の事である。

時代を作る人の貴いことはいふまでも無いが、それを羨み慕ふ心が一歩を誤ると、取返しのつかぬことになる。老莊の敎へは此點に於て吾等に反省を敎ゆるものとして、大に貴ぶべきである。列子の如きも能く此點について敎へて居る。其中の一の物語りがある。晉國に子華といふ富貴の人が

至誠の力

あつて、其門には多くの客が集まつた。中に商丘開といふものがあつた。年老いて身體も衰へた樣子である上に、服裝も甚だ見窶らしいので他の者は皆之を侮つて居た。或時に子華が多くの客と共に高臺に上つて『此處から飛び下りたものには百金を與へやう』といつた。衆が競うて飛び下りたが、誰も彼の商丘開に及ぶものは無かつた。それから黃河の岸へ來て泳いだ時も、商丘開が優勝を占めた。幾くもなく子華の家が大火に罹つた時、『藏の中へ入つて錦を取出して來る者には賞を與へやう』といふ子華の語と共に、眞先に藏の中へ入つて無事に錦を取出したのも亦た商丘開であつた。此に至つて衆は此の一老人に及ばざることを知つて、前に侮り辱めた罪を謝し、改めて其の道を問うた。商丘開は之に答へて、

唯だ之を誠にするの至らず、之を行ふの及ばざらんことを恐れ、形體の措く所と利害の存する所とを知らざるなり。心は一のみ、物の迕ふもの

目的のために手段を擇まぬ

なし。斯の如くなるのみ。

といつた。此の一語は最もよく吾等の眼を着くべき點を敎へて居る。

此と好い對照を爲す所の笑話が同じく列子の中にある。齊に非常に貪るものがあつて、或る朝市へ出て見ると店頭に夥しく金を並べて居るものがあつた。急いで其の金を摑んで逃げ出したが、日中の事ではあり、殊に人の群集してゐる市の眞中であるから直ちに捕へられた。捕へた役人が、『人の多勢居る所で盜むといふは愚ではないか』と問うた時に、彼は答へて、

金を取りし時人を見ず、たゞ金を見たるのみ。

といつたと。是は一笑話にすぎぬが、能く人の弱點を示して居る。時代を作るやうな人になるのは誰でも望ましいことであるが、斯る偉人を學ばんとするに當つて其の學ぶ所を誤つてはならぬ。偉人の心の存する所を學ばずして、唯だ其の成功の跡を學ばんとする者は、多く自ら損ひ他を損ふに

終るのみである。深く心を用ゐなければならぬ。

第八章　人事と天運

盡人事而待天命

己の努力した結果が速に現はれるのを望むは人情の自然である。しかし其の結果が必ずしも直ちに現はれるものではない。それで『人事を盡して天命を待つ』といふことが昔から敎へられて居るのであらう。然るに此語は能く世に知られて居るにも拘はらず、その出處は明でない。しかし貝原益軒の『初學知要』に說く所は、よく此語の義を悉して居るやうである。

程子曰く、人の患難に於ける唯だ一箇の處置あり。人の謀を盡せるの後は、却て須らく泰然として之に處すべし。人有り一事に遇へば則ち心々念々に肯て捨てず、畢竟何の益かあらん。若し處置し了りて放下することを會せざれば、便ち是れ義無く命無きなりと。篤信竊かに謂へらく、學者の患難に於ける、只義を以て處置し了り、而して後に須らく放下すべし。是れ人事を盡して而して後に天命に委するなり。學者須らく處置と放下との二事を守るべし。此外復た何を思ひ何を憂へんや。

前の章に引いた耶蘇の言の續きに『爾等のうち誰か能く思ひ煩ひて其生命を寸陰も延べ得んや』とあるも、畢竟同じことをいつて居るやうである。

人の壽命

實際世の中の事は自分の思ふ通りに行くものではない。先づ第一に吾等の壽命といふものが自分の思ふまゝにはならぬ。勿論平生に於て攝生に注意すると放漫な生活をすることが、壽命の上に影響を及ぼすことは確かである。けれども自分が何歲まで生きられるかといふ事を的確に知り得る人は誰もあるまい。要するに是れは人力のみで如何ともすることの出來ぬものである。ところが此の壽命なるものが凡ての事に非常なる關係をもつて居

る。德川家康は慶長五年五十九歳にして石田三成を關ヶ原に破り、元和元年七十四歳にして豐臣氏を滅して覇業を成した。若し彼が此の如くに長壽を保たなかつたならば、德川の天下といふものは實現されなかつたであらう。諸葛孔明は二十七歳にして草廬を出て蜀の宰相となり、五十四歳にして軍中に沒した。若し彼が七八十の壽を保つたならば、蜀は遽かに亡びなかつたであらう。假令實力のある人でも、其の實力を世に示すべき時機に早く出會ふのと遲く會ふのとある。若し其の時機にあはぬうちに死ぬならば、實力の有無も分らずに終るであらう。バイロンは青年の頃から詩人としての盛名を馳せたが、三十六歳にして死んだ。ルソーは少年の頃から放浪生活に入つて、自分の天才を自分で氣付かず、三十八歳の時にディジョンのアカデミーの懸賞論文を書いて、初めて其才を人に認めらるゝと共に自分でも初めて自分の天分を覺つた。若し彼がバイロンの歳に死んだら一

人と人との遇合

遊蕩兒に過ぎなかつたであらう。上杉謙信は少年の頃から威を北越にふるひ、武田信玄と相對峙して勢を爭つたが四十九歳で死んだ。北條早雲は六十歳にして伊豆の韮山城に據り、八十八歳まで生きて關東八州に勢力を伸すことを得た。彼にして若し謙信の歳に死んだなら殆んど世に聞ゆることなくして終つたであらう。

更にまた不思議に感ぜらるゝのは人と人との緣である。いかに偉大な人物でも獨力を以て大事を成すことは出來ぬ。必ず然るべき人を得て共に力を協せて、初めて大事を成すのである。漢の高祖は帝業を成して後に、自ら蕭何、張良、韓信の三人を得た爲に成功したのであると語つたといふが三人もまた高祖を得て其材力を伸ぶることを得たのである。賴朝の大江廣元に於ける、上杉氏父子の直江山城守に於ける、皆互ひに相得たることに滿足を感じたであらう。『良禽は木を擇む』といふが、如何に擇んでも嘉い

木が無ければ仕方がない。宿るべき木を得たのは幸である。若し力を協すべき人を得なければ、大才を懷いて空しく一生を送ることもあるであらう。學問や藝術の方になると人の力を借らずして、獨力をもつても大成することが出來るやうに見える。しかし能く考へて見ると、全く獨力といふものは無い。ニュートンやカントの如き人が亞弗利加の土人の中に生れて彼が如き大學者にはなれなかつたであらう。ワグネルやベートーフエンが臺灣の土人の家に出て、彼が如き大音樂とはなり得なかつたであらう。如何なる大學者大藝術家と雖も、其の研究を始めるのには何か自分より前に出た人の研究の結果を本としなければならぬ。されば斯る先進者に對して感謝しなければならぬ譯である。その先進の人も亦た後人によつて自分の研究が大成せられたことを感謝すべきである。

天台大師は支那の高僧である。法華經が支那から日本にかけて盛に弘まつたに就ては、特に天台大師の功勳を認めなければならぬのである。然るに天台が其の大を成した本は慧思の敎へを受けたのに在る。天台大師は梁の開國侯の家に生れたのであるが、十五歲の時に其國が亡びたので、十八歲にして相州の果願寺で出家した。元來聰明な人であつたので學問は目覺しく進歩し、もはや師として敎へを受くべき人も無くなつた。快々として樂しまずに日を送るうち、大蘇山に慧思といふ高僧が居るといふことを聞いた。しかし大蘇山まで行く途中には兵亂が起つて居た。それを冒して行くとなれば、如何なる危難にあふかも知れぬのであつた。天台は少しもそれを恐れなかつた。法を求むる爲には生命をも惜んではならぬ、これ諸佛の敎へたまへる所である。良き師にあふことの喜びに比ぶれば、如何なる危難も物の數でない。天台は此の決心をもつて兵亂の中を通り過ぎ、大蘇山に至つて慧思禪師に謁した。時に天台は二十三歲で、慧思は四十七歲で

此師と此弟子

あつた。天台は一見して其の德に服し、斯る良師に逢ふことの出來たのを感謝した。慧思もまた天台の非凡の人なのを見拔いて、深くその來り歸したの悅び、

昔共に靈山に同じく法華經を聽く、宿緣の追ふ所今また來る。

といつた。自分も天台も共に昔は釋尊の弟子として、同じ靈鷲山に敎へを受けた身であるが、再び共に此地に生れて師となり弟子となつたのであらうとまで思ひ入つたのである。斯くて大蘇山に止つて敎へを受くるうち學益々進み、法華經の藥王品を讀んで自ら覺り得た所を師に白したところが、慧思は

爾に非れば感せず、我に非れば識らず。

と感歎した。斯くまでに相許した師弟の情は、千數百年の後から想像しても誠に欽慕に堪へぬものである。

良い競爭者

又凡て人の技能等は競爭者があるために、それに磨かれて發達するものである。されば良い競爭者をもつた者は大に感謝すべきである。然るべき競爭の相手がなかつた爲に、その實力があまり發達せずして終つた、氣の毒な人も少くないであらう。相撲などでも昔の話にある谷風と小野川とか近い頃の常陸山と梅ヶ谷といふやうに相匹敵すべき者が二人現はれた時には、互ひに磨かれて目覺しい發達を示すものである。但し競爭が烈しくなると、時としては相妬み相憎むといふやうな見苦しいことも起るけれども互ひに競爭によつて自分の力を磨き得たことに氣付けば、そんな詰らぬ行き懸りは直ちに解けてしまふ筈である。列子の中に飛衞と紀昌の話がある。飛衞は弓術に精通せる人であつたが、紀昌はその弟子となつて射を學んだ。久しく學ぶ間に紀昌はスツカリ飛衞の術を學び盡して、師をして、『汝之を得たり』と歎稱せしむるまでになつた。そこで紀昌は今天下に於

て飛衞一人の外に吾が如く射に達したものはない。若し飛衞が居なければ吾一人のみ名人の名を擅にすることが出來やうと思つて、師の飛衞を殺さうと謀つた。

野に相遇ひ、二人交々中路に射る。矢鋒相觸れて地に墜つ。而して塵揚がらず。

とある。双方から射た箭の先と先とが當つて、共に地に落ちたのである。斯くして双方から射て居るうちに飛衞の方の箭が盡きて、紀昌の方には一本殘つた。紀昌が勢込んで最後の箭を放つと、飛衞は棘の枝をもつて之を防いだが、その棘の尖端と箭の先とが少しも差はず當つた。そこで

是に於て二子泣きて弓を投じ、塗に相拜し、請うて父子と爲り、臂を剋して以て誓ふ。

とある。互ひに其の術の妙所に達したのに感じあつて、敵對の念が全くなくなり、改めて父子の約を結んだといふは貴い話である。

敵に對する感謝

何事でも苦しまずして大成するものではない。斯う考へれば敵が多くて迫害の多く身に集るといふことも、感謝すべき事の一といはれるであらう。『うき事のなほ此上につもれかし』と詠んだのも、決して昔の人の負け惜みとはいはれぬ。

艱難は善を爲すべき唯一の機會なり。――セネカ

といふ語には深い味がある。釋尊が教を說いた五十年の間に於て、最も强い迫害を與へたのは提婆達多であつた。彼は釋尊の從弟であつて、長じて後出家して法を學んだのであるが、その心の至て驕慢であつた爲に自ら獨立して釋尊と對抗し、釋尊の勢力に及ばぬを知つて嫉妬のあまりに種々の危害を加へ、釋尊は之が爲に生命を失はんとしたことさへある。しかし少しも之を恨まず、却て

知られずに終る人

提婆達多の善知識に由るが故に、我をして六波羅蜜、慈悲喜捨、三十二相、八十種好、紫磨金色、十力四無所畏四攝法十八不共、神通道力を具足せしめたり。等正覺を成して廣く衆生を度すること、提婆達多の善知識に因るが故なり。――法華經

とて、彼より多くの迫害を受けたが爲に德を成し得たことを感謝して居るのである。

斯く數へ來れば、種々の事が集つて力を養ひ業を成す因緣となつて居ることが知れるのである。然るに一生の間あまり變化がなく、賴もしい味方にもあはず、さりとて恐ろしい敵にも逢はず、ウツカリして居るうちに老境に入つてしまふといふ人も世間には決して少くない。余の知人に昨今政治界で相當に名を成して居る、某といふ人がある。彼は關西の或る寒村の出である。先頃久しぶりで歸鄕したところが大に歡迎されたといつて、其時の感想を話して居た。故鄕へ歸つたところが丁度自分の出身の小學校で同窓會を開くといふので其處へ出席した。何にせよ村から出た唯一の名士といふわけで非常なる歡迎であつた。質素ながら眞心の籠つた宴會が開かれて、暫くすると一人の素末な服裝をした老人が側へ來て丁寧に禮をして『何卒自分の杯を受けてくれ』といふ。その杯を受けると、彼は如何にも滿足らしく『貴君は御見忘れになつたであらうが、私は當村の某といふ者だ』と名乘つた。名乘られて見ると思ひ出したが、それは自分と机を並べて習つた同級の一人であつた。而も其頃には其級で第一の秀才として知られた男の兒であつた。此處まで話して、余の知人はさも感慨に堪へぬ樣子でいつた。『其男は神童とでもいつて宜いやうな非常に賢い男で、僕などは始終いろ〳〵の事を敎へて貰つて居たのだ。ところが僕は幸にして先輩の引立てを受けて、東京へ出て身を立てることが出來たので、國へ歸れば

名士だとか何とかいつて歡迎される。彼の男を若し僕と同じ境遇に置いたら、僕などは到底及びもつかぬやうな働きをして居たにちがひ無い。唯だ彼は不幸にしてさういふ機會を捉へ得なかつた爲に、切角の天才を土の中に埋らしてしまつて、今は僕の前へ出て宛も奴婢が主人に對するやうな態度で、杯を受けられたのを喜んで居る。さう思ふと何だか氣耻しくて堪らなかつた。實際人の一生は運次第で極まるものだとツク〳〵考へた』と。

人の天分と機會

此の話には眞理が含まれて居る。今智者として知られて居る人よりも遙かに大なる智者となり得べき素質の人がその智を磨くべき機會を得なかつた爲に空しく愚者の群に埋れて居るのも多からう。若し學問を積ませたら今大學者として世に時めいて居る人よりも遙かに大學者になるべき天分の人が、何も學ばずに終るのも多からう。トーマス・グレーが田舍の墓地で作つた哀詩は有名なものであるが、彼はその詩の中に於て、田舍の敎會のうしろ手の荒れ果てた墓地に並んで居る、苦むした小い墓の有樣を叙して

此處には勇ましく、田舍の或る小壓制者に對抗して戰つたハムプテンが睡つて居る。一行の詩も書かなかつたミルトンも靜かに睡つて居る。汚い血を少しも流さなかつたクロムウエルも確かに此處に睡つて居る。

といつて居る。實際さうである。默つて働いて默つて死んで行つて、小い墓の下に骨を埋めてしまつた農夫等の中には、若し充分の敎養が與へられ又其才を發揮すべき好い機會が與へられたなら、ハムプテンの如き大雄辯家になり得た人もミルトンの如き大詩人になり得た人も、クロムウエルの如き大政治家になり得た人も居たに違ひないのである。

幸か不幸か

斯ういふ單調な生活を續けて居る人々のことを詩人は『世間の淺ましい爭ひも知らず、名利を追うてやまぬ淺はかな生活も知らず、靜かな、美しい生涯である』といつて居る。しかし其の當人達は斯く他人に羨まれるほ

どの幸福を感じては居なかつたに違ひない。幸か不幸かといふことは互ひに比べて見て初めて分ることである。彼等は都會生活を知らずに終つたのであるから、自分達の靜かな生活を幸福と知らう筈もない。唯だ無意味に近い生涯を送り盡したにすぎぬ。蘇東坡は『人生字を識るは憂患の始』といつて居るが、それは東坡のやうな字を識る人の言であつて、字を識らぬ人に字を識ることの不幸が知られやう筈はない。それを知らなければ字を識らぬことが幸福とも感ぜられまい。

反動的思想

兎に角『寂しい生活の方がいゝ』とか『世間に知られぬ方が幸福だ』とかいふことは、華やかな生活の裏面を見た人の言で、いはゞ一種の反動的の思想である。老子は『知る者は言はず、言ふ者は知らず』といつたが、老子自身にさういふ事を言つて居るのである。唐の白樂天は『讀老子』の詩を作つて

言者不レ知知者默。此語吾聞二於老君一。若道二老君是知者一。緣レ何自著二五千文一。

といつた。五千文とは老子の書凡そ五千餘言なるが故にいふのである。老子も此詩を見たなら唯だ苦笑するのみであらう。『言ふものは知らず』とは畢竟深く知ることなくして多く言ふ者を戒めたに過ぎぬので、眞によく知る者は又よく言ふのである。世を避けるといふのもそれと同樣のことで、世の華やかな生活の陰に潛む種々の煩累を厭ふのあまりに出るものである。獨り住むのが眞に幸福と思ふのではない。凡河内躬恒の歌に、

世をすてゝ山に入る人山にてもなほ憂き時はいづち行くらむ

とあるのが眞實のことである。蜀山人が此歌を翻案して、

世をすてゝ山に入るとも味噌醬油酒の通ひ路なくてかなはじ

といつたのは更に妙である。前にも說いたやうに人は本來社會生活を營む

べき欲求をもつて居るから、世を避けることを心から喜ぶものはない。芭蕉は『やゝ病身人にうみて世を厭ひし人に似たり』と自ら評して幻住庵に引籠り、

先づたのむ椎の木もあり夏木立

とて自然と共に住む悦びを語つたが、やがて山奥から出て來て門人等と往來し、諸子と共に舟を湖水に浮べて名月を賞しては、

三井寺の門たゝかばや今日の月

と詠じ、門下の俊秀と斯る風流の遊びを共にすることを喜んで、

まことに推敲のむかしながら船に今宵の遊を思へば、此座に韓愈の文章をあざむき、賈島が詩賦をもときぬべき詩人文客に乏しからねば、たとへ赤壁の前後といふとも、其地に此人をはづべきやと、見ぬもろこしを相手に取りて今宵の風流を爭ふほどに……

人の努力の結果

と大に得意になつて居る。彼もまた社交的の本性を發揮することに滿足を感ぜずには居られなかつたのである。

又往古以來久しい間の人の努力が積み重ねられて、吾等の周圍の光景が變つて來たことは、大に吾等の心を惹かずには已まぬのである。一概に物質文明といふけれども、前にもいつた通り、物質ばかりで物質文明が出來るものではない。人の貴い努力が物質の上に加はつて、初めて種々なる物が作り出されるのである。人の力を全く考へなければ、天地の偉大さを考へることも出來ぬのである。例へば吾等がヒマラヤ山の中へでも分け入つて大自然の莊嚴なる景色に對した時には、人の力などは全く小いものだといふ感を起すに違ひない。しかし人の力を以て吾等の身をそこまで運んで行つたればこそ、その莊嚴なる景色に接することも出來るのである。又天文學者が太陽や星の距離に就て語る所を聞くと、まことに宇宙は洪大なも

ので、此の狹い地上にうづくまつて居る吾々が如何にも哀れに思はれる。しかし斯ういふ洪大なる宇宙の組織は、狹い地上の人の力で斯う明かに知られたのである。吾等と同じ仲間の人の力といふものを決して輕視することは出來ぬ。而して人はたゞ天地の間の現象を眺めて居るばかりで無く、自分達の力をもつて天地の間の祕密を究め、天地の間のいろ〳〵な力を人間の用に立てることに成功したのである。

自然を味方にする

西洋の學者の中には『自然を征服する』といふやうな語を用ゐる人もあるが、余は斯ういふ用語に賛成しない。人と自然とは何も敵同志といふわけでは無いから、征服などをする必要はないのである。余は『自然を味方にする』といふやうに考へたいのである。勿論吾等は天地の間に生を受けて居るのであるから、最初より自然と離れるわけには行かぬのであるが、吾等の研究の進むに隨ひ、以前には吾等と疎遠のやうに見えたいろ〳〵の自然力が極めて吾等に親しいものになるのである。例へば昔の至つて未開な時代に於ては、陸地を歩いて行つた人が河か海にあふと、モウ是れきり進めないといふので、それ切り引返してしまつたのである。然るに其後に至つて舟といふものを發見して見ると、水は人の進むことを妨げるどころでは無い、陸を行くよりも却て早く行けることになつた。即ち人の妨げをした水が人の味方になつたわけである。又むかしは時々落雷して家を燒いたり人畜を傷けたりするより外に、電氣といふものは何の用にも立たなかつたのである。然るに今では電氣の力で車を動したり室の内を照したり、いろ〳〵の益を受けて居る。即ち人の敵であつた電氣が人の味方になつたといふべきである。斯く吾等の研究が歩を進むると共に、多くの自然力が吾等の味方になつて行くのである。しかし最初から凡ての自然力が人に壓迫を加へ危害を與へたのではない。壓迫を感じ危害を蒙るのは人の智慧が進

まなかつたからである。雨も風も水も火も最初は人の妨げとなつたのが、漸次に研究せられて人生に缺くべからざるものなることが明になり、漸次に多く利用せらるゝに至つたものである。されば今日に於て唯だ恐れられてのみ居るものも――例へば地震の如きも、吾等の智識が進むに於ては少しも恐るべきものでなくなるであらう。或ひは更に進んでその力を何等かに利用する時が來ぬともいはれまい。

それは今の處、まだ空想といふの外はないのであらうが、今までの歴史を考へて見ても、自然の大なる力に脅されながら、それに屈せずして進歩を遂げて來た人の力は、決して侮るべきものでないと思はれる。余は大正十二年九月一日の大震火災の時東京に居た。一日と二日は餘震も度々あり火の消えぬ所も方々にあつたので、全く落ちつかぬ氣分で過したが、追々と落ちついて來て、罹災の場所を見廻る氣にもなつた。日本橋から神田の

地震の時の回想

方を歩いて居るうちに日が暮れて、寂しい光景は一層寂しくなつた。あの華やかであつた都會が荒凉たる燒野の原に化し去つたのを眼前に見ては、大なる自然の前に立つて人の力の小なることを痛感せずには居られなかつた。空を見上げると二十日あまりの月が寂しげに照して居た。余は此の月を仰ぎ見てフト昔の歌を思ひ出した。今より三百餘年のむかし、此邊は一面の曠原であつた。その頃の光景を詠んだ歌に、

むさし野は月の入るべき山もなし草よりいでて草にこそ入れ

とある。いかにも此の近邊に山らしい山はないから、月が草より出て草に入つたことであらう。然るに此處に德川氏の居城が出來、その後德川氏の天下となつてから、武藏野は漸次都會となり、やがて八百八町と稱せらるゝ所謂大江戸が實現せられた。それで今より百餘年前に蜀山人は前の歌を翻案して、

むさし野の月はむかしに瓦家の唐草を出て唐草に入る

と詠んだ。瓦の側面には皆唐草の模樣がついて居る。昔は月が草より草に入つたが、屋根の瓦の唐草から唐草に入るやうになつた。まことに驚くべき變化である。その變化は專ら人の力によるものである。斯う考へて見ると人の力は決して侮るべきもので無い。自然の大なる力は都會を燒野の原に化せしめたけれども、その都會といふものは元來廣漠たる武藏野の眞中に人の力を以て造り上げたものなのである。余は斯う考へて、失望的になりかけた自分の心を自分で立て直したのである。

櫻島の回想

余はまた數年前に薩摩の櫻島へ行つた時のことをも屢々思ひ出す。その時は櫻島噴火といふ恐ろしい出來事があつてから十年目の夏であつた。島の一隅に堆積して居る熔岩は見限れぬほどの面積で、十年前の災害のいかに大きかつたかを示して居る。余は其當時の悲慘であつた有樣を同行の人々に聞いて、今更ながらに悼ましく感じたのであつたが、青年の頃に讀んだ本の中に噴火の事に就ていろ〳〵書いてあつたのをフト思ひ出した。熔岩に蔽はれた處は草も木もはえぬけれども、それは永久のことでは無い。久しい歲月を經る間には次第に變化して草でも木でもはえるやうになるといふことである。さう思つて見ると此島全體の形が宛ら波を打つたやうで遠い昔から幾度となく噴出した熔岩の固まりであることを示して居る。余の同行の中に其道の專門家が居たので之に質して見ると、いかにも其通りであるとの返事であつた。其時は青年團の集會に臨んだので、余は人々に向つて『諸君の村は十年前に恐ろしい天災に見舞はれて、今以てその害を受けて居る。諸君は大きな自然の爲に惱まされたのである。しかし諸君は自然を恨んではならぬ。今諸君が木を植えたり米や麥を作つたり、西瓜を作つたりして居るところは大昔の熔岩の土だといふではないか。諸君の家

を潰したり田や畠を埋めたりした熔岩は、久しく經つ間には諸君のために木でも穀物でも、何でも育てゝくれるやうになるのである。しかし斯うなるには無論諸君の父祖の努力も加はつて居るのである。此の一事を以て人生の有らゆる事を推して見ることが出來やう。吾等は何等かの出來事にあふ度に落膽して、自己の力の小なることを歎じたくなるのであるが、それは大に間違つて居る。吾等は吾等自身の努力を集めて、禍を轉じて福と爲すの策を立つべきのみである』と語つた。

一人の力は大きい

此等の事を思ひ合せて、吾等は人の力の決して侮るべきものでないことを強く感ずるのである。よし一人の力は小いとしても、集めれば大なる力となるのである。否、一人の力と雖も決して小いと考へてはならぬ。多くの人が氣力を失つてボンヤリして居る時に、一人が奮ひ起つて彼等を勵まし、又自ら奮つて其事に當るならば、其人の言と行とに勵まされて奮發するものが必ず一人や二人は出來る。それが又他の人を勵ますことになる。斯くして大なる力となつて、如何なる災厄にも打克つことが出來る。易の繫辭傳の中に

君子其室に居て其言を出す。善なれば則ち千里の外之に應ず、況んや其の邇き者をや。其室に居て其言を出す。不善なれば千里の外之に違ふ、況んや其の邇き者をや。言は身に出て民に加はり、行は邇きに發して遠きに見はる。言行は君子の樞機、樞機の發は榮辱の至なり。言行は君子の天地を動す所以なり、愼まざるべけんや。

とあるは人に君たる者の戒めとしていつたものであるが、何人も斯ういふ考へをもつて世に立つべきものと思ふ。

今吾等は吾等の周圍を見まはして、人の努力の結果によつて包まれて居ることを感ぜざるを得ぬのである。ゲーテは『此の天地の間は夢と思ふに

夢とは思はれぬ

はあまり美しすぎる』といつたさうだが、吾等が祖先の努力の結果によつて包まれて居るといふ意味からいつても、夢と思つてはならぬのである。歩いて居る路は人の力によつて開かれたものである。眼に入る樹木は人の力によつて植えられたものである。田も畑も家も橋も皆人の力によつて出來たものである。吾等の心は周圍の凡ての物に惹かれざるを得ぬ。周圍の凡ての物の中には遠い昔からの人の力が宿つて居る。吾等は凡て此等のものを夢の如くに輕く視ることは出來ぬ。佛國のルソーは『凡ての物は神の手を離れた時に皆美しかつたが、久しく人の手に在る間に汚れて來た』といつて居る。それも一面の觀察としては尤もな所があるけれども、人の手に久しくある間に決して惡くなつたばかりではない。

文明の進歩が世の中を複雜にし、面倒を多くしたことは事實である。しかしそれを理由として文明の進歩を呪ふといふことは間違つて居る。よく

文明の進歩を呪ふ者

有る事であるが、相當の年頃の人が小兒の嬉々として戯れ遊んで居るのを見ると『小兒は氣樂で羨しい、モウ一度小兒になつて見たい』といふ。しかし其時に魔術者が彼の前に現はれて『然らばお前の希望通り小兒にしてやらう』といつたら、恐らく其人は『御免蒙る』といつて逃げ出すであらう。世の中の面倒なのに疲れた人がモウ一度小兒になつて見たいなどといふのは、そんな事をいつても小兒に戻ることはないと知つて居て、自分の氣を紛らすためにいふのである。眞實心の底から小兒の方が幸福と思ひつめて居るわけでは無い。銀座通りのイルミネーションなどの明るく輝いて居る所を歩いて居ると非常に頭が疲れるけれども、それから横へ曲つて暗い路へ入ると何となく寂しく、物足らぬ感じが起きるのである。物質的の進歩には、多くの人の精神的の力が宿つて居るのであつて、吾等はどうしても之に心を惹きつけられるのである。何事にも利害相伴ふものであるか

ら、其の弊害の方ばかり見れば限りもなく弊害はあるけれども、之によつて文明の進歩を呪ふといふのは偏見といはなければならぬ。

文明の弊

例へば印刷術が進歩して誰でも自由に書物を手に入れることが出來るやうになると、兎角書物を輕んじて、氣を入れずに讀む者が多くなるといふ弊害は確かにある。余などが少年時代に漢學を習つた時には、大日本史を全部筆寫したといふ先生もあつた。さういふ書物の得難い時分に自ら筆寫するくらゐの人は、實に魂を打込んで讀書したに違ひない。又郵便制度が出來て、切手一枚貼れば何處へでも手紙がやれるといふ世の中になつてから誰でも手紙を麁末にするやうになつたのは事實である。むかしは通信が容易に出來なかつたから、一通の手紙にも心を籠めて書いたものと見えて、今吾等が讀んで見ても非常な感動を受けるやうな手紙がある。近頃の人のには斯ういふやうな貴い手紙は殆んど無くなつた。凡てが斯ういふ風に、

不平均が目立つ

便利になれば其の便利に狎れて、物事を輕々しく考へるといふ弱點を誰でも持つてゐる。しかし此等の弊害がある爲に、印刷術の進歩や郵便制度の發達を呪ふといふのは間違ひである。一般の人が之によつて受くる所の恩惠は實に莫大なものといはなければならぬ。又文明の進歩によつて世間の不平均が目立つて來たことも注意すべき事實には違ひない。凡ての人が自分の足で歩くより外ないといふ時代には、富んだ人と貧しい人の差別もそれ程には目立たなかつたが、自動車といふものが出來て見ると、自動車に毎日乘ることの出來る人と出來ぬ人との差が明かに貧富の懸隔を示して居るやうに見えるのである。乘れる人には自動車ほど便利なものは無いが、乘れぬ人から見れば自動車はたゞ泥を飛ばす道具のやうなもので、是ほど厄介な物はないと思はれる。斯ういふやうな多くの事柄が人の心を險惡ならしむる原因となつて居ることは否定されまい。一茶が『江戸住人』と題

して

錢なしは青草も見ず夕涼み

と詠じ、また『裏長屋のつきあたりに住す』と前書して、

涼風の曲りくねつて來りけり

と詠じたのも、田舍と異つて繁華たぐひ無き江戸の生活の半面を見たものであらう。また鵜飼を詠じた句の、

夢の世を鵜と語りつゝ語りつゝ

とあるは殊にあはれである。魚を食つて直ぐに吐かせられる鵜もあはれであるが、そんな業をして纔かに生命を繋ぐ鵜飼も悲しい身の上である。共にはかない一生であると、鵜を相手に語りつゝ鵜飼は毎日を送つて居る。その悲しい境界を察しもせず、鵜飼に魚を取らせて、それを肴に醉ふて居る人々も一方には居るのである。世間が進歩するほど、斯ういふ事は益々目立つて來るのである。それに憤慨する人々が一切物質的文明の進歩を呪ひ、昔の單純であつた生活を戀しがるのも人情として無理からぬことである。

不用意の罪

しかしながら此等の事によつて文明の進歩を『人類に幸福を持來さぬものである』と斷ずるのは誤つて居る。譬へば道を歩くのに草履では低過ぎるといつて下駄を穿くとする。其時片足だけ下駄を穿いて片足が草履であれば非常に歩きにくい。けれども是は下駄が惡いのではない、片足が元の草履のまゝであるから惡いのである。若し双方下駄になつてしまへば大に歩きよくなるのである。物質的の文明が進歩したのが惡いのではない。之に伴つて其の物質的文明の進歩に應ずべき精神的訓練を努めなければならぬのに、之を怠つてゐたのが惡いのである。自動車の出來たのが少しも惡いのではない、それは結構なことに違ひないのである。たゞ社會の凡ての

條件と自動車の出現とがシックリと調和しない爲に往々にして問題を起すのである。紡績機械が發明されてから機械工業の盛になる時代が開け、此の新時代の工業は自然大資本を要する所から、資本家の得意時代となり、それから資本家と勞働者の反目の端が開かれたとは吾等の度々聞いた話である。事の成行きはさうであらうが、紡績機械その物に少しも罪があるのではない。紡績機械を發明した人が資本家に利益を與へやうといふ意圖をもつて居たわけでは勿論ない。若し咎むべきものがあるならば、機械工業が盛になつて後、人と人との關係を如何にすべきかに就ての研究が足りなかつた點に在りといふべきものであらう。其等の點に於て非難すべき事が如何に多くあらうとも、機械の發達を人の眞面目なる努力の結果が形に現はれたものとして尊敬することを拒むべき理由とはならぬ。

獨り機械の發達ばかりではない、凡ての人の眞面目なる努力の結果は皆

努力は空に歸せず

大に尊敬すべきものである。其等は凡て吾等に對して『努力は空に歸するものでは無いぞ』といふことを物語つて、吾等を勵まして居るのである。吾等は共に大きな自然の中に生きて居るから、自然の支配を受けなければならぬ。又複雜なる社會に生きて居るのであるから、自分の豫想しなかつたやうな出來事に屢々出逢ふ。それや是やと思ひ合せて 兎角『萬事は運次第だ』といふやうな氣分になり易いのであるが、徐かに過去數百十年の事を回想して見れば、その極まりなき曲折變化の中を經て、人の眞面目なる努力が多くの貴い結果を遺して來たことを否定し得ぬのである。吾等は此處に吾等の心を安んずべきである。

百川日夜逝。物我相隨去。惟有宿昔心。依然守故處。

とは東坡の詩中の句であるが、吾等も亦斯の如き心をもつて世に立ち物に接すべきであらう。

第九章　人格の尊重

大なる運命の力に支配されながらも、人の努力は空に歸せずして、永く其の結果を後に遺すものである。余は其等の事を思ふ度に、いつも亡き小泉八雲先生のいつたことをおもひ出すのである。余等は大學生時代に小泉先生の講義を聽いた。先生は十八九世紀の英國詩人に就て連續的に講義して居たのであるが、殊にシェレーの詩を批評して稱讃の語を重ね、彼が僅かに三十歳にして世を去つたことを深く悼んだ。殊更それが自然の死でなく、ボートが覆つて溺死したといふ一種の災難であつたゞけに一層悼ましいと語つて後、先生は沈んだ聲で『若しシェレーが七八十の壽を保つたなら、如何に多くの名作を吾等に遺したことであらう。彼に比類なき天才を與へながら、彼に長い命を與へなかつたのは如何なる神慮であらうか、吾

小泉八雲の語

等の心では測られぬ』といつたまゝ暫く沈默して居た。吾等學生も皆シーンと靜まり返つて居た。暫くしてから先生は又優しく微笑して『イヤそれでも宜い、それでも吾がシェレーは不朽である』といつた。それが其日の講義の終りの語であつた。

人の美點を見出さうと念ずる

小泉先生は學生に論文を課したが、如何に缺點の多い論文でも其の文章の組織なり、或は中に含まれた思想なり、何處かに採るべき所があれば、それを見脫すことは決してしなかつた。先生は實に沙の中から珠を拾ふ人のやうに、何とかして人の美點を見出さうと念じて居たやうに思はれた。余等は此點に於て大に先生に敬服して居たのであるが、先生の沒後いろいろの逸話を聞いた中に、斯んな話があつた。先生の家の近くに或る理髮店があつて、其處の亭主は剃刀を使ふことが頗る上手であつた。先生はそれを非常に稱讃し、いつも丁寧に之に接して居たといふことである。尤も先

仕事の選擇

生は誰にでも丁寧な方であつたが、殊更此の亭主の技倆に感服した爲に禮を盡して居たのだと聞いた。斯く小い技術に於ても其の優れたものを尊敬するといふことは、如何にも文士としての先生の風格を現はすものとして面白く思はれる。吾等は此の小い逸話によつて敎へらるゝ所がある。人が何を業として生涯を送るかといふことは、自分の考へによつて大概定まるのであるが、又周圍の事情によつて定まる場合も決して少くない。ワシントンは最初海軍の士官になりたいといふ希望をもつて居て、それを母に語つたところが母は贊成してくれた。しかし母の樣子が何だか其愛子を海へやるのを好まぬやうに見えたので、ワシントンは自分の希望を擲つた。其時はいかに母の心を痛めさせぬ爲とはいひながら、內心一種の寂しさを感じて居たに違ひない。しかし若し彼が海軍士官として相當に成功して居たら、獨立軍の爲に力を盡す事にはならなかつたであらう。幸か不幸か其時だけでは分らぬ。世の中はまことに複雜なものである。一人の人が何處に居て、何をして暮すかといふことは、種々の事情によつて定まるものと見なければならぬ。されば誰でも出來るだけ自分に適する仕事を求めるやうに意を用ゐなければならぬのであるが、一旦自分の仕事が定まつて後までも『是は果して自分に適した事であらうか』と繰返し繰返し思案して居るのは愚である。

業は勤むるに精しく嬉むに荒む、行は思ふに成りて隨ふに毀る。

といふ韓退之の語も、

決斷せる心の前には困難なし。

といふ英國の諺も、陳腐のやうではあるが確かに當つて居る。努めてやまなければ、大概の仕事は自分に適するやうになるものである。されば自分の仕事に全力を注いで、それに卓越した者になるといふことは、何より貴

職務に忠實なれ

い事といはなければならぬ。

ペンを揮ふのに非凡な手をもつて居た小泉先生は、剃刀を動すのに非凡な手をもつて居た理髮店の主人に敬意を拂つた。ペンと剃刀とはちがつても、それに精力が傾注される所に共通なる點があるのである。其の職務に忠實なれといふ敎訓は何處でも屢々繰返されることであるが、自分の職務だからイヤな事でも一生懸命にやらなければならぬと、澁い顏をしながらやつて居たのでは本當の事の出來るものではない。自分に與へられた仕事の貴さが分つて、初めて眞に忠實なるを得べきである。

余は製材所の工場へ行つて見て、いつも良い敎訓を與へられたことを感ずる。其處では大きな木材が機械で引き切られて、或は板となり或は柱狀のものとなり、見る間に姿をかへて行くのである。余はそれを見ていつも考へる『一本の大きな木がいろ〳〵に切り分けられて、いろ〳〵に姿をかへるのである。其の使途もいろ〳〵に分れるのであらう。或るものは柱となり、或るものは敷居となり、或るものは椽となる。しかし木材の性質は何處に使はれても變ることはない。強い木は何處に在つても強い、脆い木は何處に在つても脆い。何に使はれても木としての價値は無くならぬ。柱となつても敷居となつても、乃至は緣の下に使はれても、それ〴〵の役には立つのである』と。但し斯ういふことをいふと必ず反對する人がある。それは適材を適所に用ゐなければならぬといふ說である。同じく材木を使ふにしても棟に適當した木もあり、床柱に適當した木もある。一つの家の中に强い木でなければ堪へられぬ部分もあり、脆い木でも間に合ふところもある。それを辨へずして材木を使へば非常なる不經濟になる。世の中の事もそれと同樣である。人には能あり不能あり、皆一樣なものでは無い。其所を得れば立派に役に立つ人も其所を得ぬ爲に碌々として終ることが屢々

適材適所の說

ある。此等の事實を根據として『何に使はれても役に立つ』といふ考へは間違つて居るといふ說も立つのである。

此說はいかにも尤もである。適材を適所に置くやうにすることが社會の健全なる發達を期するために最も大切である。又その規模は大きいにせよ小いにせよ、兎に角一の事業を主宰する人は適材を適所に置くやうに考へることが極めて肝要である。しかし是れは人に仕事を與へるに就ての用意であるが、仕事を與へられる方としてはどう考へたら宜いのであるか。其所を得ずして悶々として居る人は世の中に隨分多いやうである。自ら千里の駒を以て任じ、世に伯樂なしと歎息して居るのはまことに悼ましい事である。けれども世の中は日にまして複雜になるのであるから、斯ういふ悼ましいことも自然多くなつて行くわけである。しかし斯ういふ人達は徒らに伯樂無しと歎ずるよりも、もう少し落着いて考へて見る必要がある。度

伯樂無しの歎

々孔子の事を引用するが、孔子は『生民ありてより以來未だ夫子あらず』といはれた程の大人物であるが、自ら其の過去を回想して、

吾少くして賤し、故に鄙事に多能なり。

といつて居る。又史上に傳ふる所によれば、其の青年時代に季氏の吏となり倉廩の事を管理して居た時には穀物の出納極めて正確であつた。尋いで牧畜の事を管理した時は牛羊の生育が甚だ盛であつたといふ。卽ち孔子は大才をもつて居ながら小事に當つても決してそれを輕んぜず、全力を盡して職務を果したことゝ思はれるのである。たとへ小事と雖も人生に益のある事である以上は、全く意義のないものでは無い。其の意義ある事に當るに、之を輕んじて全力を注がぬといふは、自ら人生を侮るものといはなければならぬ。孔子の如き人は左樣な愚なことをしなかつた筈である。

遠く孔子の例を尋ぬるまでもない。西鄕南洲は青年の頃から國事に奔走

し、薩州に於ける勤王黨の重鎮であつたが、藩論の動搖して定まらなかつた時代には屢々排斥を受けて、大島へ流され又重ねて沖永良部島へも流された。大志を抱きながら時に容れられず、配所に蟄居してゐるのであるから悶々の情に堪へぬ筈であるが、南洲は常に島民のために種々力を盡し、又島吏をも懇に指導した。現に二度目の在島中に書いた『與人役大體』と『間切横目役大體』の二書は今に殘つて居る。與人役といふのは村長の如き職で、横目役といふのは警察官の職である。その與人役に就て、

第一天より萬民御扱被ㇾ成候儀出來させられざる故、天子を立られて萬民それぞれの業に安んじ候やう御扱被ㇾ成候へとの事に候へば、天子御一人にて御屆き不ㇾ被ㇾ成故、諸侯を御立被ㇾ成候て領分の人民を安堵致させ候やう御まかせ被ㇾ成たることに候へ共、諸侯御一人にて國中の人民御屆不ㇾ被ㇾ爲ㇾ成故、諸有司を御もふけ被ㇾ成候も。專萬民の爲に候へば、

役人においては萬民の疾苦は自分の疾苦にいたし、萬民の歡樂は自分の歡樂といたし、日に天意を不ㇾ欺、其本に報ひ奉る處のあるをば良役人と申すことに候。

と說き、又横目役に就て

監察と申して諸役人は勿論、萬事の目付役にて唯咎人を探し出したの、口問が上手抔と申ことは枝葉の譯にて、全體咎人の出來ぬやうにする處横目役の本意に御座候。深く心を盡して咎に陷らぬやう仕向け候が第一の事に候。

と說ける如き、實に南洲其人の面目の躍如たるを覺ゆるのである。又凶年に備ふるために社倉を作ることを計畫し『社倉趣意書』といふものも今に殘つて居る。此等のものを讀むと、南洲が如何に島民の爲に熱心に力を盡したかを推し得らるゝのである。心は一つ心である。一小島の島民の爲に

盡す心が卽ち皇國の大事の爲に盡す心となるのである。

眞面目に骨折つて見れば、いかなる事でも意義のないものは無い。如何なる境遇にも自ら安んじて處り、如何なる業にも全力を傾けて當るといふ寛い心持を作ることが大切である。大田垣蓮月尼の歌に、

宿かさぬ人のつらさをなさけにておぼろ月夜の花の下ふし

といふのがある。一夜の宿を賴んで斷られたのは如何にも悲しいことであるけれども、自分に風流の心さへあれば、花の下に露宿して朧月夜のけしきを賞し、人のつらさを却て情と思ひかへすことも出來るのである。世に處するには斯る寛い心を養ふことが頗る肝要である。『自分は斯んなつまらぬ仕事をすべき人間ではない、自分の力量を認められぬのは殘念だ』といつて慷慨する人は、自己の偉大なることを吹聽して居るやうに思ふかも知れぬが、實は境遇に打克ち得ずして悶々たる自己の識量の狹小なることを告白して居るものなのである。

寛い心

腰懸けの氣分

青年の人などが卑い地位に置かれると『マア仕方がない、一時の腰懸けだ』といふやうな事をいふが、斯ういふ心が生涯を誤るのである。斯ういふ心で自分の與へられた仕事を宜い加減にして置く。それが二日三日と段々續いて行く間に、スツカリ腰懸け的の習慣がついてしまふ。斯うなると何でも眞面目に熱心にはやれなくなる。斯ういふ人に何か大切な事を任せても、モウ之を完全に處理すべき熱心と實力とが無くなつて居るから必ず失敗するのである。俳優などでも東京の大歌舞伎に居た人が何かの事情で旅興行に出かけ、何年ぶりかで又東京へ歸つて來ると、藝が非常に荒んで來て居る。それで之を評する人が『臭味がついた』などゝいふのである。つまり田舍の玩賞眼の低い人達ばかり相手にして居た爲に、眞面目に努力することをせず、萬事宜い加減にやつた習はしが附いてしまつて、直さうと

しても直らぬのである。されば常に斯の如き荒んだ氣分を作らぬやうに意を用ゐなければならぬ。明の王道焜の語に、

貧は羞づるに足らず、羞づべきは是れ貧にして志無きなり。賤は惡むに足らず、惡む可きは是れ賤にして能無きなり。老は歎ずるに足らず、歎ずべきは是れ老にして虛しく生くるなり。死は惜むに足らず、惜む可きは是れ死して補無きなり。

とあるが、眞に有益なる語である。

適せぬ仕事

勿論其人に適した仕事をすれば勞少くして功が多いであらう、不適當な仕事ならば勞多くして功は之に伴はぬであらう。しかし適當な仕事が與へられぬ場合には、不適當なる仕事でも爲さぬには優るではないか。譬へば食物を取るのに成るべく榮養分の多いのを擇むのは望ましいことであるが、若しさういふ物が得られなかつた時には、たとへ榮養分の少い物でも食すべきである。それを文句をつけて食せずに、唯だ腹の減るのに任せて置くのは愚である。文句をいつて居る間に身體の疲勞はたゞ增すばかりであらう。伯樂無しと歎じて時を空しくするよりも、たとへ不適當な仕事にでも全力を注いでやつた方が確かに社會に對して多くの貢献をして居るのである。又其人自身も一日を空しく過さなかつたといふ點に於て悅びを感じ得べきではないか。又たとへ自分に適せぬ事でも全力を傾注してやればよし卓越するには至らずとも、相當な成績を擧げることは出來るに違ひない。これは出來ぬ事を出來る事に變へたので、卽ち一の勝利である。

克己に伴ふ愉快

凡て困難に打克つことには大なる愉快が伴ふものである。例へば暴風雨の中を突切つて歩く時なども、苦しいにはちがひ無いけれども、雨にも風にも負けなかつたと考へることに依つて一種の悅びが感ぜられる。自分に不適當な事を努めて相當な成績を擧げるのも、或は低い待遇に對して不平

を懷かぬやうになるのも、考へ樣によつては之と同樣の愉快な事となるであらう。それは皆自分の力によつて、外から迫つて來る困難を排し得たのであるから、一の勝利と目せらるべきものである。『自己に克ち得ぬ者が如何にして能く外敵に克たん』とソクラテスのいつたのは能く知られて居るが、『自分を支配する者はやがて他人を支配するやうになる』といふ英國の諺も要するに同じ事を敎へて居る。王陽明は諸州の賊を討平して大功を立てた人であるが、その四十七歲の時に人に與へた書の中に、

山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し。區々鼠竊を翦除するは何ぞ異と爲すに足らん。若し諸賢心腸の寇を掃蕩して以て廓淸平定の功を收めば、此れ誠に大丈夫不世の偉績なり。

といつて居る。實に外敵に克つ勇氣よりも更に貴いものは自己に克つ勇氣である。孔子が『勇者は懼れず』といつたのも、此等の事を思ひ合せて一層意義深く感ぜられる。

納簾に疵がつく

如何につまらぬ仕事でも、一旦自分の仕事として引受けた以上は全力を盡す。又それに就て失敗があれば飽くまで自分で責を負ふといふ態度は、眞に雄々しいものであつて、其の周圍の人々に與ふる感化の力もまた偉大なるものである。是れは德川時代の末頃の話であるが駿河町の越後屋へ一人の田舍の老爺が來て、國へのみやげにと手拭を一反買つて歸つた。後で店の者が調べて見ると、その手拭は尺の足らぬものを間違へて賣つたといふことが分つた。そこで彼の客は田舍の人らしいが何處に泊つて居るのかと手を盡して調べたところが、馬喰町の某といふ宿屋に泊つて居たことは分つたが、既に歸國した後であつた。國はと聞くと、伊豫の松山だといふ。越後屋では番頭連が集つて評議したところが『尺の足らぬ物を賣つて、それを取換へなかつたといふ事になれば越後屋の納簾に疵がつく。是れは損

得づくの問題ではない。いかに遠方でも使をやつて取換へなければならぬ』といふことに衆議一決した。此上は一刻も早くといふので、態々伊豫の松山まで使を立て、一反の手拭と外に謝罪のしるしにと聊かの品を添へて遣つたといふことである。交通の不便であつた昔の事であるから、江戸から松山まで往復に二ヶ月を費したであらうが、僅か一反の手拭の爲に斯ういふ手數を重ねたのも所謂『納簾に疵をつけまい』との趣意に出たものである。此の一事は凡ての商人に向つて『商賣を大事にしなければならぬ』といふ教訓を與へたもので、品物は手拭一反であるけれども其の關する所は至て大きい。凡ての人が此の心懸けをもつて居たならば、社會はいかに健全になることであらう。一反の手拭でも尺の足らぬ物を賣れば、店の納簾に疵がつくといふ考へは貴いものである。それと同樣に、たとへ瑣細な事でも之に全力を注がなかつた爲に不結果を來すならば、自分の人格に疵がつくのだといふ考へを持つべきである。

端役と云ものはない

たとへ詰らぬ仕事でも、自分の心一つで之を價値ある仕事に變へることが出來る。演劇に於て見ると忠臣藏の由良之助とか、太閤記の光秀とかいふやうな重い役と、所謂端役とがある。しかし如何なる端役でも上手な俳優がやると良い役になる。兜軍記の榛澤六郎の如きも以前にはつまらぬ役であつたが、一たび名優が之に扮して後は良い役になつて、近頃では一座の中でも相當に地位のある俳優が演ずる習はしになつた。忠臣藏の定九郎も昔はつまらぬ役であつたさうである。之に就て『東の花勝見』といふ書の中に、初代仲藏が此役に扮して大當りを取つたことが記してある。

王子稲荷へ參詣して、何卒此度の定九郎評判能きやうにと祈念して其歸り道、日暮方に及んで道灌山下通り稲荷森に差懸りける。時に向ふより來る侍一人、浪人者にても有しや、古き黑小袖所々ほころび切れ、綿の

見えるを着て、月代は山の如くはえ、丈高く何さま其體怪しく見え、若しや追剝なぞにては無きやと、ぞつとして恐ろしく思ひ、こわ〴〵摺違ひ通りしに何事もなくてホッと息をつきたり。是より思ひ付て定九郎を其形の拵へにいたせしに、珍しき拵へ當時に叶ひたりとて至て其節大評判に預りしは、實に王子稲荷の加護なりとて有難がり咄せしを、其頃西川鈍通子に語りぬ。其前定九郎の拵へは誰の致し候も大島の木綿廣袖に丸ぐけ帶、狩人のかぶる麻苧の山岡頭巾に脚絆草鞋にていたし來りしに今は誰にても黑小袖に傘となりしは此時より始る。是仲藏の出世狂言なり。

仲藏以前には、定九郎といふ役は一向つまらぬ役であつたらしいが、仲藏が工夫を凝して演じて以來は忠臣藏の中でも主要な役の一となつたのである。端役を輕んずるは間違つて居る。一たび名人の手を經れば端役も良い役になるので、畢竟端役といふものは無いことになるのである。

間接の功勳

世に知られずして一生を終り、つまらぬ仕事に心を勞し身を勞して暮す人は不平の起るのも無理はないが、其處で一つ考へて見なければなるまいたとへ詰らぬ事にでも、全力を注いで居るものは必ず其の周圍の人に強い感化を與へる。その感化を受けた人が懸命で働けば更に又他の人に感化を與へる。斯くして展轉して其の力は限りなく及んで行く。その多くの人の中に幸に力を伸すべき機運にあひ、大事に當つて其の責を果し、國家社會に大なる貢献を爲し得るものが有るならば、最初の感化を與へた人が間接に此の大功勳を立てゝ居るわけである。孔子は天下の民を濟ふの大志を有して而も時に容れられず、唯だ門人を集めて先王の道を講じて居たのであるが、或人が孔子に『子奚ぞ政を爲さゞる』と問うたのに答へて、

書に云く、孝か惟れ孝、兄弟に友に、政有るに施すと。是も亦た政を爲

すなり、奚ぞ政を爲すことをせん。

といつた。『是も亦た』とは門人に教育を施して居るのも直接國政に當ると同じ事であるとの義である。此處に孔子の自ら安んずる所がある。顯要の地位に立つ者のみが國に奉じ社會に盡して居るのではない。所謂つまらぬ地位つまらぬ仕事を輕んぜず賤しまず、之に全力を注いで、前にいふやうに自ら大なる感化を周圍に及ぼすならば、卽ち端役を活かして端役でないものにした譯ではないか。

余は近年よく旅行するが、昔から偉人として知られた人の出生地へ行つて、其人に就て其地方に傳はつた種々の傳說を聞くことが旅行中最も大なる樂みである。斯くして多くの傳說を比べて見ると、其處に一致點のあるのを見出すのである。それは此等の偉人を出した家に、曾て立派な人物でありながらあまり世に知られず、默つて死んで行つた人が必ず一人や二人はあるのである。余は『積善の家には必ず餘慶あり』といふ易の語の差はざることを此の事實によつて痛感した。幕末の傑士として江川英龍のことは人が多く知つて居る。然るに伊豆韮山の江川氏の家を尋ねて其の祖先のことを聞くと、英龍の如き人の出たのは偶然でないといふことが能く分るのである。其の遠い祖先は保元の亂の時に崇德上皇の御味方に參り、戰敗れて後に東國へ落ちて來て伊豆に居を定めたのである。而して鎌倉時代に至つて江川吉久といふ人があつて日蓮上人に歸依し、此より代々法華の信者となつた。其の上人に歸依するに至つた徑路も面白い。吉久は四條金吾賴基と相識つて居たが、賴基は熱心なる法華の信者である。弘長元年五月日蓮上人が伊豆の伊東へ流された時に、賴基は大に上人の身の上を案じ、幸ひ江川吉久が上人の配所に近く住んで居るので、折々安否を問ふことを之に託した。吉久は友人の賴みを容れて上人を配所に尋ねた。罪人として流

伊豆の江川氏

された人を尋ねるのは、身に難儀の及ぶ恐れが無いのでもなかつたらうが、友誼を全うするためには一身の難儀を問はなかつたのであらう。斯くて吉久は上人と對面して忽ち其の德に服し、忠實なる信者となつたのである。此の吉久の末裔に英龍が出た。

ところが英龍のみが傑士ではない。其父の英毅といふ人が立派な人物であつたのである。江川氏の家には英毅の書いたものが多く遺されてあるが之を見ると其の書體といひ其の内容といひ實に立派なもので、流石は英龍の父であつた、此父にして此子ありといふべきだと感歎せざるを得ぬ。又有名なる反射爐の如きも英龍一人の力で出來たのではない。英毅が四疊半の茶室の床を去つて土間となし、其處で鑄物をしたり練瓦を燒いたりして之を其子の英龍に傳へたので、英龍は父より學び得た所を元として反射爐を作ることが出來たのである。又英毅の妻なる人もまことに賢夫人であつて特に英龍の敎育には深く意を用ゐたさうで、之に就てもいろ〳〵の事が傳はつて居る。世に顯はれたる英龍のうしろには、隱れたる英毅夫婦が居る。英毅をして幕末の時代に在らしめたら英龍の爲した所を、或は其以上の事をも爲したであらう。時を得ずして世に顯れなかつたのは殘念のやうだが、其の努力は英龍の事業となつて顯はれたのであるから少しも悔むには及ばぬ。

此父にして此子あり

背後の力

尙ほ遡つて見ると、英龍のうしろに隱れたる力がまだ多くある。それは江川氏の代々が土地の百姓のために積んだる勞苦である。江川氏は代々此の伊豆韮山の代官であつたが、代官といふのに實は二通りあるのである。吾等は演劇や小說などで多くの惡代官の事を見て居るので、代官といへば百姓をいぢめて私腹を肥す者のやうに思ふのであるが、江川氏などはさういふのとは全くちがふ。諸侯の領地は代々傳はるのであるから領内の百姓と

親みが厚くなり、仁政を行ふやうになり易い。代官の方は德川氏の領地（天領と稱して居た）を管理するために派遣された役人であるから、百姓をいぢめて私腹を肥し、或る時期が來れば又他の所へ轉じてしまふといふのも多くあつた。斯ういふのは『渡り代官』などゝ呼ばれて居た。江川氏は斯ういふ代官とは異つて、代々同じ土地の代官であつたのだから、百姓とは非常な親しみがあつた。それで凶年にでもあふと、百姓は如何にも氣の毒である、幕府へは納むべき物を納めなければならぬといふので、中へ挾まつて非常なる苦心を重ねたものである。時には自分の私財を擲つて百姓の納むべき分を補つたこともあつたので、江川氏は代々貧しかつたさうである。此等の事が皆英龍を活動せしむべき背後の力となつて居たものと見なければならぬ。江川氏のことにあまり多くの言を費したが、之を以て顯はれたる力と隱れたる力との共に大切なることを證せんとしたのである。耶蘇は希臘の人に向つて、

一粒の麥若し地に落ちて死なずば唯一つにてあらん。若し死なば多くの實を結ぶべし。

といつた。是は至言である。舊い麥が地の中で朽ちて、それが根となつて芽を出し、その芽に穗が出來て多くの麥となるのである。默つて死んで行く人は返す返すも貴いものなのである。

更に考ふべきことがある。それは敗れたる者の力といふことである。勝つた者は世にもて囃され、敗れたるものは闇に葬られるのであるが、敗れたる者が果して何も爲し得ずして終つたといへるであらうか。余の少年の頃であつたが名人の稱を得た本因坊秀榮と方圓社長中川龜三郎といふ人と對局せしめ、勝つた方へは何百圓、負けた方へは何百圓とかを與へやうといふ事を計畫した人があつたが、實行が出來ずに終つたといふ話を聞いた

敗れたる者の力

余は此事を聞いてウッカリ『負けて何百圓も貰へるなら僕でもやりたい』といつた。其時父が『馬鹿な事をいふな。負けるといつても唯だ負けるのではない、充分骨を折つて負けるのだ』といつて余をたしなめた。其時は何の事かよく分らなかつたが、後になつて成程と納得が出來た。名人上手の打つた一局の碁は、其道の人に多くの事を敎へる。相對して互ひに工夫を凝すために種々の名手が現はれて來る。つまりは何れか一方が勝つのであるが、負けた人の打つた手も多くの人に大なる參考となるのである。若し相對して競ふといふことが無かつたら、勝つた方の人もそれ程の名手を案出し得なかつたであらう。されば勝つた人は、自分の相手となつて烈しい競爭をして、自分を勝たしてくれた人に感謝すべきである。

近頃では中等以上の學校に入學希望者が非常に多いので、入學試驗といふ難關が容易に越えられぬ。それを越えた者は頗る得意である。殊に高等學校などになると二十人の中から一人取るといふ有樣であるから、入學の出來たものは意氣揚々として居る。余は其等の人達を捉へて『まことにお目出たい事だが、自分一人の力と思つてはならぬ』と屢々いふのである。入學が出來たのも目出たいが、余はそれよりも努力の結果が現はれたことを目出たく思ふ。一生懸命になつて見ないと、誰でも自分の力量を自分で知ることが出來ぬ。生涯物事を宜い加減にして暮す人は、自分にはどれ程の事が出來るのかを生涯知らずに終るのである。入學試驗に就てはいろいろの弊害もあるけれども、兎も角も一生懸命に努力して見たといふ事は善いことである。『骨折れば出來るのだ』といふ自信を得たのは、將來の爲に頗る善い事である。而して其の一生懸命に勉强したのは畢竟競爭者が多いからである。若し樂々と入學が出來るのであつたら、多くの人はあまり勉强しなかつたであらう。然らば彼等を一生懸命にさせた者は彼等の競爭者で

勝つた者の反省

敵に對する感謝

ある。而して其の競爭者の大多數は失敗して、入學が出來なかつたのである。されば入學の出來た者は自分一人の力と思はないで、彼の失敗者の人々が自分を勵まして勉强させ、自分に自信を得せしめてくれたのに對して深く感謝しなければならぬのである。

釋尊の從弟に提婆達多といふ者があつた。彼もまた釋尊と同じく出家して道を學んだのであるが、名利の欲があまりに强い爲に眞の悟りを得ることが出來ず、常に釋尊の多くの人に歸依せらるゝを嫉んで敵對の念をもつて居た。而して阿闍世王をそゝのかして種々なる惡虐の行ひをさせ、殊に釋尊の一門に對して烈しい迫害を加へた。釋尊は大なる石に壓されて生命を失はんとする程の危い目にもあつた。而も之に對して少しも恨みを懷かず、却て彼に勵まされて德を積むことの出來たのを悅んで、

提婆達多の善知識に由るが故に、我をして六波羅蜜、慈悲喜捨、三十二相八十種好、紫磨金色、十力四無所畏、四攝法十八不共、神通道力を具足せしめたり。等正覺を成じて廣く衆生を度すること、皆提婆達多の善知識に因るが故なり。——法華經提婆品

と感謝して居るのである。人の心は緩み易いものであるから、樂になれば努力を怠ることを免れぬ。釋尊でさへも提婆に勵まされて努力した爲に大なる德を積み多くの人を救ふことが出來たとて、彼を善知識とまで稱へて居るのである。況して尋常一樣の人は競爭の相手もなく、迫害を加へらるゝといふ事もなくて、懸命の努力を續けることの出來やう筈はない。競爭の弊を擧ぐれば限り無くなるであらうが、競爭によつて多くの人が勵まされて、努力を重ねて居ることは事實である。人生は其の努力の結果によつて惠まれるのである。斯く考へて見れば多くの敗れた人に對して、彼等は競爭の相手となつて他の多くの人を勵まし、それ等の人々に成功せしめて

生きた機械

自身は其の犧牲になつた者として、悼み且謝すべきである。

要するに人の努力は皆貴い。その顯はれたるものと隱れたるものとを問はず努力は皆尊重されなければならぬ。但し自ら其の努力の貴きことを知らず、周圍の事情に引き摺られて、澁面を作つて働いて居るものは、生きながらにして自身を機械化させて居るのであるから、たとへ其の働きが世間に何等かの役に立つて居るとしても、一人の人としては意義のない生活である。耶蘇が

人若し全世界を利するとも、自己を喪ひ自ら亡びなば何の益あらんや。

といつたのは至言と稱すべきである。たゞ如何なる境遇に在つても努力の貴いことを忘れず、自己の一擧手一投足が自己の全體を發現するものであることを知つて、其日其日を有意義に送つて行く人をこそ最も頼もしい人といふべきであらう。此の如き心を以て毎日を送る人は、また他の人の努力を尊重することをも知つて居る人である。斯くて互ひの人格を認めあひ、互ひの努力に感謝しあふことにより、社會は健全なる發達を遂ぐべきである。

義と利

第十章　人と物　一

前の章に引いた『人はパンのみにて生るものにあらず』といふ語は確かに人の本性を言ひ現はしてゐるが、しかし人はパン無くして生ることも出來ぬのである。儒教などでは、利を賤んで義を重んずることを頻りに教へるのであるが、それは利に趨つて義を忘れる者を戒めるためであつて、利を圖ることを全く無用といふのではない。易の繫辭傳には、

天地の大德を生といふ、聖人の大寶を位といふ。何を以てか位を守る、曰く仁。何を以てか人を聚むる、曰く財。財を理め辭を正し、民の非を

爲すを禁ずるを義といふ。

とある。人の生存繁榮といふことを外にして道を立てやうといふのではない。又易の文言の中には、

利とは義の和なり。

といふ語もある。伊藤東涯が之を解釋して『利を專にすれば則ち義なるを得ず。唯だ物を利すれば則ち義と相和して乖らず。故に義の和といふなり』といつたのは能く要を得て居る。

佛敎に於ては屢々物質的の欲を斥けなければならぬと說かれてある。『多欲は苦なり』とか『多く求むるは罪惡を增長すとかいふ戒めは種々の經に出て居る。しかし例へば

知足の法は卽ち是れ富樂安穩の處なり。知足の人は地上に臥すと雖も猶ほ安樂なりとす。不知足の者は天堂に處すと雖も亦た意に稱はず。不知足の者は富めりと雖も而も貧し。知足の人は貧しと雖も而も富めり。——佛遺敎經

と說き、或は

夫れ富貴は求むる時甚だ苦しみ、既に得已りて守護するに亦た苦しみ、後還りて之を失ひ憂念してまた苦む。三時の中に於て都て樂みあることなし。——百緣經

と說いたのをよく味はつて見ると、一切を忘れて唯だ富を求むるものを警めたので、生活を安穩にすることの必要を否定したものではない。されば國王等に對する佛の敎へは、常に人民の生活を安穩ならしむることに重きを置いてある。

王は日の如く善く世間を照し、月の如く物に淸涼を與へ、父母の如く恩育し、慈矜にして天の如く一切を覆蓋し、地の如く萬物を栽養し、火の

如く惡患を燒除し、水の如く民を潤澤せよ。――雜寶藏經

といふが如きは其の一例である。安らかに生活することが人間に大切であることを認めぬ敎へといふものはない。

唯だ人の欲望は限りなく募つて來るけれども其の欲望を充すべき物には限りがあるから、其處に種々の弊が生み出されて來る。欲望を充さんが爲には種々の計略が案出せらるゝのであるが、殊に恐るべきは多數の力を假りてその欲望を充さんとする者である。利を以て誘はれて心を動さぬ人は少い。それ故に多數を糾合せんとする者は常に餌を以て之を釣らうとするのである。六韜の中に太公望の言として

夫れ魚その餌を食へば乃ち緡に牽かる。人その祿を食めば乃ち君に服す。故に餌を以て魚を取れば、魚殺すべし、祿を以て人を取れば人竭すべし。

とあるは能く人情を悉したる言である。池の中へ麩を一つ投げると多くの

恐るべき多數の力

鯉が集つて來る。其等の鯉は別に睦ましくすべき理由をもたぬのであるが、唯だ麩一つに惹かれて集るのである。斯くして利の爲に集つたものが多數になると、その多數を恃んで樣々の横暴を働くやうになる。世の中にこれ程恐ろしいものは無い。一人の力では如何に横暴なことをやつても多寡が知れて居るが、多數を恃んでやる横暴は殆んど際限がない。聖德太子が

人皆黨あり、亦た達者少し。是を以て或は君父に順はず、乍ち隣里に違ふ。――憲法第一條

と仰せられたのは名言である。達者とは眼前の小さな欲望に囚はれぬ人のことである。黨を結ぶのは少しも惡くないが、達者ならぬものが相集つて黨を結ぶために、限りなく弊害が生じて來るのである。

多數で定めたことはいつも正しいといふのは非常なる誤解である。多數の判斷が誤つて居た例は數ふるにたへぬ程ある。アゼンの市民の多數が愚

愚なる多數

誰にも責任がない

であつた爲に賢人ソクラテスは毒盃を仰いで死んだ。イスラエルの國民の多數が愚であつた爲に耶蘇は磔にされた。支那の國民の多數が愚であつた爲に孔子は世に用ゐられずして終つた。多數の判斷は往々にして間違ふ。その間違つた爲の損失は結局自分達が負はなければならぬのである。勿論多數の人の幸福を謀るのはいつでも望ましいことであるが、多數の人の意見に從へば必ず多數の人の幸福が得られるとは定まらぬのである。却て少數の達識の人が公平無私の考へを以て多數の幸福の爲に謀つた時に、多數がその惠みに浴するといふ場合が多いのである。何事でも之に決定を與へるに當つては、その結果に就て責任を負ふことが肝要である。其の結果に就て責任を負ふが故に、熟慮して後に斷行することも出來るのである。若しどうなつても責任がないといふことであれば、善い判斷は出來ぬのである。然るに多數で定めるといふことになると、誰が責任を負ふか明かでない。そこで勢に乘じて隨分常軌を逸するやうなことをもするのである。余の青年時代に十數人の友達と遠足したことがある。東京の近郊の或る地に泊つて、夜更くるまで快談に耽つたのであるが『月夜の景色を見て來やう』と一人が言ひ出すと、皆がドヤ〳〵と一緒になつて外へ出た。二三町行くと湖水があるので、高聲に話しながら其處まで來たが、湖畔の路に『車止め』とかいた杭が立つて居た。『斯んな所へ棒杭なんぞを立てゝ、邪魔だナア』と一人がいふと、皆も之に雷同してエイ〳〵聲を出して其の杭を拔き取つて、湖水の中へ投げ込んで歸つた。翌朝余は早く起きて獨り彼の湖畔を散歩したが、昨夜投げ込んだ杭が水面に浮んで居るのを見て、『何故あんな無法なことをしたのか』と自分のした事がツク〴〵淺ましく感じられた。東京へ歸つてから此事を話し出して見ると、同行の誰彼も余と同じ感を起したといふことが分つた。余はその後も時々其夜のことを想ひ出して、革

命といふものは彼のやうな心理狀態から生み出されるのであらうと考へて見るのである。

多數は賴みにならぬ

されば昔から多數の人の爲に謀つて、感謝せらるゝことを豫期して居たのが、却て迫害を受けた人も少くない筈である。イブセンの戲曲『公衆の敵』にはよく此の有樣が活寫されてある。ドクトル・ストックマンは南ノルウエーの或る市の名望家で、市民のために誠心誠意を以て努力したのであるが其の誠意が認められず、實兄で市長をして居るペータア・ストックマンを初め多くの人と敵對の關係となり、全く逆境に陷つてしまつた。終には市民の怨望の的となつて迫害を受け、『公衆の敵』といふ名を負はせらるゝことになつた。彼が妻に向つて、

今日になつて初めて分つた。世界で一番强い人はタツタ一人で立つ人だ。

といふのが全曲の終りである。是れは實に悲痛の語であるが、一面の眞理を語るものである。宋の司馬光は君子人として多くの人に景慕せられたのであるが、それでも多數の人を相手とする政治家の生活に疲れ果て、官を退いて閑居するの樂みを說いて、

犧牲心と滿足の念

逍遙徜徉惟だ意の適する所。明月時に至り清風自ら來る。行くも牽かるゝ所なく、止まるも柅めらるゝ所なし。耳目肺腸卷て己が有と爲す、踽々焉たり洋々焉たり。知らず天壤の間復た何の樂み有つて以て此に代る可きを。――獨樂園記

といつて居る。これは至極氣樂なことをいつて居るやうであるが、實は公衆を相手にして居た生活の悲哀を物語るものである。

斯く公衆を相手にして居る人は誰も自己の努力の酬ゐられぬことを感ずるのであらうが、しかし其の努力が一部分でも公衆のためになるならばそれに滿足を感じ、自己の受くる報酬の如きは全く度外視して居る哲人も古

來から少くない。其の極致に至つては印度の龍樹が、

菩薩の身心は藥樹の一切根莖枝葉を取ると雖も而も我に由りて益を得たりと分別せざるが如くなるべし。――十住論

といつたやうな心にもなれるのであらう。人は藥樹の根莖枝葉を取り、之を服して各自の病を癒すのであるが、藥樹はたゞ默つて取られて居て、之に對する報酬などを求めぬのである。此の如き心を以て世のため人のために盡すのが眞の哲人の行ひである。外から見れば如何にも堪へ難い事のやうに見えるが、其人に取つてはそれが卽ち悅びなのである。犧牲になるとか獻身的とかいふことは、外から之に對して加ふる所の讃辭である。其人自身は此の如き行ひをしてこそ初めて生を此世に享けたるかひがあると考へて、その苦みの中に滿足を感じて居るのである。楠木正成が兵庫の湊河で戰死する時に、弟正季と共に『願はくは七度人間に生れて國賊を平げん』と誓つたといふのは有名な話であるが、若し正成にして其の勞の報ゐられぬに不平を感じ、人生はたゞ苦の連續とのみ思ふならば『モウ斯んな事は御免を蒙りたい』といふであらう。七たび迄も生れ返つて同じ事に盡したいといふは、其の苦しい獻身的の働きの中に滿足を感じたからでなければならぬ。

周圍を明るくする

斯く自己を犧牲にすることは、卽ち小き自己を拋て多くの人のために盡すのであるから、卽ち小き自己のかはりに大なる自己を得たものと解釋することが出來るので、此處に大なる滿足が存するわけである。何處にでも斯ういふ心の人が一人居ると、その周圍は明るくなる。その地位身分の如何を問はず、斯ういふ心の人は世の中の光りといふべきである。法華經の神力品の中に、菩薩の行の貴いことを說いて、

日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く、斯人世間に行じて能く衆生の

闇を滅す。

といつてある。日月の光明ほどには容易になれぬけれども、假令小い炬火であつても其の周圍の闇を滅する力を具へて居るのである。若し之に反して、小い自己の欲望を滿足せしめんが爲に勢力を作ることの必要を感じ、名利の餌を提げて多くの人を誘ふことになると、同じ弱點を有する者同士が競うて集つて來る。此の群集が世間を暗くして行くのである。

『局に當る者は惑ふ』といふは事實である。名利の爲に狂奔する者を外から見ると、いかにも笑ふべき有樣であるが、自身が名利を以て誘はれる場合になると、ツイ心が動くものである。大隈言道は

餌につきていのち失ふうろくづを人より外におもふなりけり

と詠じた。魚が命を失ふのを知らず餌の下に集るのを見ると、いかにも愚に見えるけれども、それを愚と見て居る人が自ら同じやうな道に誘ひ入れられて居るのに氣付かぬことが多いのは悼むべきである。斯く同じ弱點をもつて居る人々が多く集り、多數を恃んで私を遂げやうといふ場合になると、種々の名を設けて其の私心を裝飾することに努めるので、弊に弊を重ぬるに至るのである。正義とか公道とか、天下の爲とか國家の爲とかいふ語がいつも裝飾として用ゐられる。其の裝飾に眼を眩まされて、その群集に加はるものも亦た少からぬやうになる。彼の一七八九年に始まつた佛國大革命は、久しく壓迫されて來た人達が『自由を與へよ』といふ叫びを擧げたので起つたものであるが、その自由を與へよといつて起つた人々が勢力を得るやうになると、自由も正義も蹂躙して唯だ自分の我儘をやる。それに反抗する者が又自由を口にして起つといふ風で、混亂に次ぐに混亂を以てし、恐ろしい虐殺が續いて行はれた。夫と共に國事に盡して却て妬みを受け、一七九三年に至つて死刑に處せられたローラン夫人は、その斷頭

私心の裝飾

臺上に於て、『ォ、自由よ、爾の名によつて行はるゝ殘虐の事のいかに多きよ』と叫んだといふが、眞に悲痛の語である。

明治元年三月に御發表になつた所謂五箇條御誓文の第一條に『廣く會議を起し萬機公論に決すべし』とあるのは、誰もよく知る所である。しかし此の語を『凡て多數決によつて定める』といふ御趣意と解するならば、極めて淺はかなことになるであらう。勿論會議によつて物事を定めるとなれば、多數決になるわけであるが、その多數決が私心によつて纏められたる多數決であるならば公論といふ意は失はれるわけである。公論といふは公道に基く所の論でなければならぬ。されば同じ御誓文の第四條に『舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし』と仰せられてある。なほ其の第三條には『官武一途庶民に至る迄各其志を遂げ人心をして倦まざらしめんことを要す』とある。國民が各其の志を遂げ各生きがひのある毎日を送るやうになつて、初めて人心が倦まぬのである。それには唯だ多數決で物事を定めるといふだけではならぬ。其の多數決が眞に公道に合せるものでなければならぬ。公道とは何であるか、人々をして各その具有せる本性を發揮し、各意義ある生活を送ることを得せしむる所の道でなければ、公道とはいはれぬ。孔子は

多數決と公道

天何をか言ふや、四時行はれ百物生ず。天何をか言ふや。

といつた。卽ち天地の公道の行はれて居るさまを語つたのである。此の天地の公道が社會に行はれて、初めて人心は倦むこと無きを得るのである。

明治天皇は此の如き大理想を以て維新の大業を御創めになつたのであるから、徒らに衆議によつて凡てを決しやうといふのでなく、躬を以て衆を率ゐ、衆をして健實なる途を擇ましめんとの御決心をなされたのである。それは五箇條御誓文と共に發表せられたる宸翰の中に於て、

衆議の指導

今般朝政一新の時に膺り、天下億兆一人も其處を得ざる時は皆朕が罪なれば、今日の事朕自身骨を勞し心志を苦め、艱難の先に立ち、古列祖の盡させ給ひし蹤を履み、治績を勤めてこそ始て天職を奉じて億兆の君たる所に背かざるべし。

と仰せられたのに徵しても知るべきである。尙ほ明治十四年十月に下されたる勅諭に於て、明治二十三年を期して國會を開くといふことが告げられてあるのであるが、その勅諭の中には、

顧みるに立國の體、國各宜きを殊にす。非常の事業實に輕擧に便ならず。我祖我宗照臨して上に在り。遺烈を揚げ、洪模を弘め、古今を變通し斷じて之を行ふ、責朕が躬に在り。

と仰せられてある。此等の御言葉によつて維新の大業を創められたる御精神の在る所を辨へなければなるまいと思ふ。

國民の凡ての者のため

天皇が御身を以て國民を率ゐたまひ、天地の公道に基いて制度を立て、國民一般の幸福を增進せんとしたまふは、獨り吾等日本國民の感謝し奉るべき所なるのみならず、何れの國と雖も仰いで範を此に取るべきものである。されは又明治二十二年の紀元節に憲法を發布せられた際には勅語を賜はると共に（これは前の章に引いた）重ねて上諭を發せられ、憲法制定の目的を說かせられて、

朕が親愛する所の臣民は卽ち朕が祖宗の惠撫慈養したまひし所の臣民なるを念ひ、其の康福を增進し其の懿德良能を發達せしめんことを願ひ、又其の翼贊に依り與に俱に國家の進運を扶持せんことを望み……

とある。卽ち日本國民の凡ての者の康福を進め、凡ての者の德と能とを發達せしむると共に、凡ての者が國家の進運を扶け得るやうにしたいといふ、まことに有難い聖意である。此の勅語と上諭とには、主として吾が國の上

下三千年の歴史に基いて、斯る聖意を述べさせられてあるのであるが、實に吾が國の史的事實のみならず、人といふものゝ本性に照して見て、動すべからざる眞理を含んだものと申すべきである。

平等觀と差別觀

人が皆平等に人であるといふことも眞である。人は皆差別のあるものであるといふことも亦た眞である。如何なる人も皆世の中の用に立つて居るには違ひない。しかし其の用に立つ程度に差のあることは爭はれぬ。平等觀にのみ偏すると、差別觀にのみ偏するとは共に中正の道に外れたものである。此事は誰でも冷靜に考へて見ればよく分る筈であるが、其時の勢とか自分の立場とかによつて、何れにか偏し易いものである。概していへば優勝者は差別觀に囚はれ易く劣敗者は平等觀に囚はれ易い。下に臨む時は差別觀、上へ向ふ時は平等觀を振舞はしたくなる。此處が吾等の如き聖賢でもなく、佛菩薩でもない者の弱點である。時に巨萬の富を積んだ人や高い地位に上つた人の成功談なるものが發表されるのを見ると、何れも非常なる苦心をしたとか、先見の明があつた爲に成功したとかいふことが盛に並べてある。それは如何にもさうであらうが、併し運の良い惡いといふことも確かにある。（第八章參照）それであるのに所謂成功談の中に『運がよかつたのだ』といふやうなことは殆んど見當らぬ。皆自分は特別の人間であるといふやうに語つて居る。ところが失敗續きといふやうな境界の人のいふ所を聞くと、大概は『ナニ成功した者が必ずしも實力があるといふわけでは無い、要するに運がよかつたのだ。自分等でも運さへよければ成功したのだ』といつて居る。斯ういふ人の說を聽くと特別の人間があるのでなく、唯だ特別に運の良いと惡いのがあるのみだと思はれる。此の兩者の說く所は何れも一方に偏するものなるを免れぬのである。

運よくして成功した人の多いのは事實であるが、しかし同じやうな好運

運を捉へる力

に出逢へば誰でも成功するかといふに必ずしもさうでは無い。その好運を捉へる力のない人は、好運に出逢つても何事も爲し得ぬのである。例へば明智光秀が信長を殺したのは、豐臣秀吉の爲に成功の途を開いたものだと見る人もある。成程さう見ることも確かに出來る。秀吉が好運者であつたことは爭はれぬ。信長にも良い將士は幾人もあつた、光秀を討ち破つて主人の讎を報ずる程の力のあるものは決して秀吉一人ではない。例へば柴田勝家の如きも優にその力を有して居たと思はれる。然るに勝家は上杉氏を討つて越中魚津を取り進んで越後に入らんとして居た。秀吉はそれよりも比較的交通の便利な備中高松に居た爲に勝家よりも早く主人の死を知り、急いで駈けつけて復讎を果し得たのである。若し勝家と秀吉と其の所を換へて居たら、必ずや勝家が大功を立て人望を收めることを得たであらう。斯く觀察すれば秀吉の成功は全く好運の爲とも思はれるのである。しかし

得意の人と失意の人

此際に處して秀吉の如く大胆に且敏活に行動し得た人が果して幾人あつたらうか。若し彼の大胆と敏活なくして彼の立場に立つとも、決して彼の如き大功は立てられなかつたであらう。春にあはねば如何なる花も其の美しさを示すことは出來ぬ。しかし同じく春に逢つた花の中でも、櫻は櫻である、梅は梅である。ペン〳〵草が之と色を競ふことは出來ぬ。

されば吾等は新しい時代を作るやうな働きをした人の爲には、其の時を得て其の天分を遺憾なく發揮し得たることを悅び且祝すべきである。吾等の中より此の如き人を出したのは、吾等全體の誇りでなければならぬ。而して斯る得意の地位に立たずして、隱れたる仕事に全力を注いで居る人の爲には、その努力に對して、感謝を惜まぬと共に、『若し此人をして得意の地位に立たしめたなら、時代を率ゐるやうな働きが出來たかも知れぬ』と考へて、假にも之を輕んじ侮る念を起さぬやうにしなければならぬ。若し

又自ら得意の境遇に在るならば、物盛に過ぐれば必ず衰ふるといふことを深く念はなければならぬのである。老子は

天の道は其れ猶ほ弓を張るが如きか。高き者は之を抑へ、下き者は之を擧ぐ。餘有る者は之を損し、足らざる者は之を補ふ。

といつた。是れ大に味ふべき言である。希臘の神話の中にアドニスの物語りがある。彼は美の化身たるヴキーナスに戀ひ慕はれたほどの美少年である。彼は到る處に於て歡び迎へられて樂しく毎日を過したのであるが、或日彼の姿は何處にも見えなくなつた。人々が頻りに彼を探したけれども彼は見出されなかつた。夜に入つて多くの若い婦人は手に手に炬火をもつて彼を探し歩いた。『アドニス、アドニス』と呼ぶ聲が野から森へと響いた。終に婦人達はアドニスが血に塗れて草の中に横はつてゐるのを見出したが彼はもう冷い死屍となつて居た。アドニスは猪の牙にかゝつて生命を失つたのであつた。アドニスは何故死んだのであらう、彼は斯る酬ゐを受けるやうな人ではないがと、人々は語りあつたが、結局彼が斯る禍にあつた原因は『あまり美しすぎるから』といふことに決定せられた。盛に過ぐれば禍が來るといふことは昔の希臘人にも考へられて居たのである。

能く讓る者

盛にすぐる者は危いといふ思想は、また常に讓るものは後に大なる報を受くべきものであるといふ思想を生むのである。支那の王道といふものは大體周の盛時にその範を取ることになつて居るが、周の天下八百年の久しきを得たといふは畢竟其の祖先が久しく德を積んで其の報を得なかつた爲と考へられて居る。古公亶父の王たりし時に西方の蠻人に攻められたが、戰つて多くの民を損せんことを恐れ、自分の一族だけを纏めて竊かに陝西の領土を去り、岐山の下に移つたところが『仁人なり、失ふべからず』として其後を慕つて來るものが多く、岐山の下に忽ち一小王國を成した。其後

西伯（卽ち文王）に至り其德に懷く者多く天下を三分して其二は西伯に屬したけれども、西伯は敢て自ら帝たらんと望まず、恭しく殷に仕へて居た。此等の事が武王以後に至つて大に酬ゐられて來たのだといふことである。又釋尊の祖先に就ても此と相似たる傳說がある。昔憍薩羅國の甘蔗王に四子があつた。其後少子が生れた。少子の母は四子の母よりも位の下れる者であつたが自分の生んだ子に王位を嗣がせたいといふ考へから四子を父王に讒した。四子は累を父に及ぼさんことを恐れ、國を去つてヒマラヤ山麓に至り一湖畔に寓した。本國の民四王子の德を慕ひ來り住するもの少からず、忽ちにして一小國を成した。これ卽ち迦毘羅城の初めにして、釋尊は此地に誕生せられたといふことである。

斯樣の傳說には深い味がある。能く讓るといふは如何にも消極的の考へのやうに見えるが決してさうでない。能く讓る人は物に囚はれず、名譽や

囚はれぬ心

權勢に役せられぬ人であるから、責任ある地位に立つ時には立派にその責任が果されるのである。此等の事に思ひ合せて、論語に出て居る次の問答は如何にも意義深く感じられる。

子曰く、吾未だ剛なる者を見ず。或人對へて曰く、申棖。子曰く、棖や慾あり、焉ぞ剛なるを得ん。

實にその通りである。慾ある者は他に對して求むる所の多いものである。他に對して求むる所多くば、如何して自己の主義主張を貫くことが出來やう。佛敎に於て『能捨の心』の貴いことを屢々敎へるのも實に之が爲である。財利に囚はれぬ人に金を多く持たせれば、能くその金を使つて世間の役に立つ仕事を創めることが出來る。何時でも地位を去り、何時でも勢力を人にゆづることの出來る人に地位を與へ勢力を持たせれば、能く世を動かし人を導いて行くことが出來るのである。

行き懸りを脱し得ぬ人

李斯の傳を讀んで見ると、敎へらるゝ所の多きを感ずる。李斯は秦の始皇帝に用ゐられて大に勢を得た者であるが、初め『恥は卑賤より大なるなく、悲みは窮困より甚しきはなし』とて志を立て、終に秦に仕へて功を立て丞相の地位を得た。其の一族の繁昌は人の羨む所で、門前の車騎千を以て數ふといふ程であつた。流石に彼は苟卿に從つて學問をした人だけあつて『今人臣の位吾が上に居る者なし、富貴の極といふべし、物極まれば則ち衰ふ。吾未だ駕を稅する所を知らざるなり』といつて歎じたといふが、始皇の死して後、二世皇帝の意を失し、叛逆の名によつて其一族と共に皆殺された。其時に彼は昔上蔡の一賤民であつた時の却て安全なりしことを回想して、その第二子に向ひ『吾汝と復た黃犬を牽き、俱に上蔡の東門を出て狡兎を逐はんと欲するも豈に得べけんや』とて泣いたといふ。自分で危いと知りながら、いろ／＼の行き懸りで其の危い所を離れることが出來ず、終に生命を失ふといふは如何にも悼ましい事であるが、世の中には斯ういふ例が少くない。世間の政治家にして小き李斯ならぬものは稀であらう。人は時々反省するものであるが、又行き懸りに引戻されて切角の反省が力を失つてしまふことが多い。深き反省が必要である、ツイ一通りの反省では役に立たぬ。

盛衰以外に在るもの

慚愧の水を以て塵勞を洗へば身心俱に淸淨の器となる。――心地觀經

と敎へられたるは之が爲である。塵勞とは卽ち惑へる心のことである。

余の庭に五六本小いヒバの木が植ゑてある。其の側に小兒が向日葵の種をまいた。春になつてその向日葵が芽を出した時にはヒバの葉に隱されて居た。それが段々伸びて、夏になるとヒバよりも遙かに高くなり、ヒバは全く壓倒された姿であつた。それから秋となり冬に入ると向日葵は全く枯れてしまつて又ヒバの方が目立つて來た。余はそれを見て、人生の榮枯盛

衰も先づ斯んなものであらうと、獨りツク〴〵考へた。豊太閤の聚樂第が落成した時、そのあまりに華麗を極めたのに憤慨したのでもあらう、門前に『驕る者久しからず』と書いた貼紙をしたものがあつた。さうすると其の側へ又誰か『驕らずとても久しからず』と書いたといふ話がある。その事實の有無はよく知らぬが面白い話である。斯く盛衰の常なきことを達觀して、自ら斯る潮流の外に超然たらんと望んだ人も少くない。例へば李太白の如きは、

功名富貴若長在(シヘニラバ)。漢水亦應(タシ)二西北流(ニルル)一。

といひ、また

浮生速(カニ)二流電(ヨリ)一。倏忽變(ズ)二光彩(ヲ)一。天地無(キモ)二彫換一。容顏有(リ)二遷改一。對(シテ)レ酒不(ニ)二肯飲(テマ)一。含(テ)レ情欲(ヲスルヲ)二誰待(タント)一。

と詠じた。是も詩人の言としてはまことに面白いが、何も酒に醉うて無常迅速の感を紛らさずとも、自ら努力して、盛衰榮枯の外に超然たり得べき心を作る方がよいではないか。

若しもそれが出來ぬとすれば、人生に安らかな日は一日も無いことになる。世の中に失敗者の數は極めて多い。其の失敗者は所謂成功者を呪つて居る。羨むといふ程度のことは宜いが、それでは止まらないで、之を呪ふやうになるのである。常に多數の人から呪ひの眼を以て見られ、呪ひの聲を擧げられて居る者は、餘程しつかりした覺悟の無い限り、決して晏然たることを得ぬのである。月燈三昧經に『布施の十種利益』といふことが說いてある。卽ち人を救ふ爲に力を盡すにより十種の利益が得られるといふのである。其の第七に『衆に入りて怯れず』といふのがある。自分が多くの人の爲に力を盡して居るといふ自信をもつて居るから、如何に多くの人の眼で見られても、心に恐るゝ所なく悠然として居られるのである。又そ

呪はるゝ成功者

の第九に『手足柔軟なり』とある。人は神經過敏になると手足までも突張るのであるが、心に安んずる所ある故に手足も柔軟で、ユツタリとした態度を持ち續けることが出來るのである。若し斯ういふ覺悟もなくて、唯だ所謂成功者の列に入り、常に周圍に呪はれて居るものは憫むべきである。たとへ強いて勢を張り威を示しても夜々の夢は決して安からぬであらう。

平等を夢みる人

又劣敗者の群に在つて所謂成功者を嫉視し、取つて代らんことを夢みて居る者の愚なるはいふまでもない。成程今の世の中は不公平にちがひ無い。富や勢力を占有して居る人々の中に品性も下劣であり、思慮分別も足らぬ者が少くないのは事實である。此の不平均を何とかして改めなければならぬといふ考へも起りさうなことである。けれども假りに一國の富を平分して、凡ての人に過不足なく頒つたとして其の結果はどうなるであらう。昔の輕い話を集めたものゝ中に、順禮と鉢開き（物を乞うて歩く者の一種）が寺の縁の下に寢て語りあふさまがかいてある。先づ順禮は自分が天下を治める身分になつたならば必ず斯ういふ事を實行して見せると意氣込んで、

さあらば國々の辻堂の板敷を高々と作らせ、縁の下にて其方達とゆるゆると話したい。

といふ。鉢開きは京の町を一日でも治めて見たいといひ、若しそれが出來るならば

町中の犬を皆打殺させて、ゆる〳〵と鉢を開きたい。

といつたとある。是れはあまり皮肉な話であるが、よく人の情を悉して居る。如何なる高い地位を得ても、之を保つべき力の全くないものは忽ちにしてその地位を失ふ。いかに多くの富を得ても、之を運用すべき覺悟のない者は又忽ちにして之を失ふに極つて居る。いかに骨折つて平均して見て

も、又忽ちに不平均となり、富は又少數の人の手に集るにちがひない。富める者の豪奢の生活を羨み呪ふ者に金を多く持たせれば、今までの思ひを一時に晴さうとして、恐ろしい豪奢の生活を始めるに極つて居る。さうすれば之を惡む者が又群り起つて其の富を奪はうとするであらう。斯樣のことを何時迄續けて居ても人生の平和は得られぬのである。(然らば世の乏しき者を救ふことをせずに置いてよいかといふに、決してそんな事はない。救護と感化の事業は最も大切なものである。それは章を改めて細論するつもりである。)

根本は心の問題

要するに是れは心の問題である。貧乏に堪へられぬものが金を持てば必ず奢侈になる。失意の地位に居て世を呪ふ者を得意の地位に置けば必ず横暴をやる。此の根本の心を元の儘にして置いて徒に社會の組織のみを改めて、それで各個人の幸福を增し得るやうに考へるのは誤れるの甚しきものである。されば飢て心さへ正しければ食はずに活きて居られる、住むに家なく臥すに床なくても安樂だといふわけには行かぬ。それは兩々相俟つて行かなければならぬものである。明治天皇が日本國民の凡ての者に懿德良能を發達せしめ、共に國家の進運を扶持せしめんことを念としたまひ、先づ自ら『身骨を勞し心志を苦め艱難の先に立ち』衆を率ゐて、各自の心の本を修めしめんとなされたのは眞に仰ぐべく貴むべきの至である。人々が此の大御心を身に體して各自の心を修むることに努むるならば、物質上の問題も隨つて解決せらるべきである。

第十一章　人と物　二

人は天に覆はれ地に載せられて生きて居るものである。天地の間の種々の物の力に惠まれて毎日を送つて居るのである。しかし物の力を善用する

物心の關係

ものは心の力である。されば物心兩者の關係を明にすることが頗る必要の事となるのである。『中庸』には

唯だ天下の至誠、能く其性を盡すことを爲す。能く其性を盡せば則ち能く人の性を盡す。能く人の性を盡せば則ち能く物の性を盡す。能く物の性を盡せば則ち以て天地の化育を贊くべし。以て天地の化育を贊く可ければ則ち以て天地と參すべし。

とある。『盡す』といふは知り盡して明ならざるなきの義である。先づ吾が性を知り、推して以て凡ての人の性に及び、人を知つて然る後に凡ての物の性を知ることが出來るといふのである。なほ之に續いて、

誠は物の終始なり、誠ならざれば物なし。是故に君子は之を誠にするを貴しとす。誠は自ら己を成すのみにあらず、物を成す所以なり。

とある。此の『誠ならざれば物なし』の一語はまことに深い意味を有するものである。

外界とは何ぞ

一體吾等を圍んでゐる外界とは如何なるものであるか。普通に考へらるゝ所では、吾等のまはりに山川草木等の凡てが羅列して、千秋萬古かはらぬ姿を示して居るのである。誰も外界の事物の實在することに就て何等の疑ひをも起さぬのである。しかし能く考へて見ると、外界の實在を認むるものは吾等自身の心に外ならぬのである。吾等は眼に物の姿を見、耳に物の聲を聞き、手足を以て物に觸れて其の冷暖疎密を感じ、之を集めて所謂外界の實在を認めて居るのである。若し見ず聞かず觸れぬならば、外界はありと雖も無きに同しいではないか。又眼や耳によつて事物の形狀音響等を知つたばかりでは何の役にも立たぬ。例へば今吾が前に一脚の机があるとすると、吾が此の机に就ての智識は五官を通じて成立つ。眼を以て其の四角で薄赤い色で、四脚を有するものであることを認める。それから手を

以て其の表面を打つてカーンといふ音を立て、耳を以て其音を聞いて是れは可なり堅い木であると判斷する。それから其の表面や脚を撫でまはして、滑かで冷かなことを知る等、凡て五官を通じての働きである。しかし眼はたゞ其の形と色とを報ずるのみである。耳はたゞ其の音を報ずるのみである。手はたゞ其の堅く滑かで冷かなことを報ずるのみである。この形と色と、音と、堅く滑かで冷かな感じとは、一つの机の有する性質であるといふことは、眼も耳も手も更に之を報じ得ぬのである。而も吾は其の凡ての性質が一つの机に屬するものなることを疑はぬ。これは吾自身に眼耳等の報ずる所を統一する力を持つて居るが爲に外ならぬのである。若し此の統一力が存在しなければ、眼耳によつて報せらるゝ所は何の用をも爲さぬであらう。

知るとは要するに統一して知ることである。若し此の統一が行はれなければ、机の色と形と聲と、滑かさと冷さとはあつても、机といふものは無い。バラ〳〵の机の性質はあつても、一つの机といふものは無い。此の統一力こそは卽ち吾自身の本體といふべきである。又吾等は互ひに個人として認めあひ、互ひに交際をして居る。昨日あつた人に今朝又逢へば、その同じ人であると互ひに認めあつて、挨拶をするのである。しかし昨日吾が眼に映つた其人の姿と、今朝映つた姿とは全然同一ではなく、何處かに異つた所があるのである。それでも同じ人として之を認めて怪まぬのは、昨日の彼と今朝の彼との姿が多少かはつても、それを統一する所の彼なる者のあることを知つて居るからである。若し自己にも統一を認めず、他人にも統一を認めぬならば、人と人との交際といふものは全然成立たぬわけである。統一力が破壞さるれば個人といふものは破壞されなければならぬ。

吾等が外界に對して居る間、吾等の心はいつも活動して居る。英國の哲

經驗といふこと

學者ロックは吾等の智識が盡く經驗によつて成立つことを說いて、經驗を始めぬ前の心は白紙の如きもので、外界から受くる多くの印象によつて智識の成立つことは、宛も白紙の面に文字が印刷せらるゝ如きものであるといつた。如何にも吾等の智識が經驗によつて成立つことは事實である。しかし吾等が經驗を積むのを白紙の面に文字が印刷されるのに比したのは當を得たものでない。印刷される白紙は全く受動的であるが、吾等の心は受動的でなく、いつも活動して居るのである。吾等が見たり聞いたりするのは、眼や耳を明け放しにして色や聲の入つて來るのに任せて居るのではない。その色を捉へ其の聲を捉へんが爲に努力して、初めて見ることも聞くことも出來るのである。されば同じ色がいつも同じ色に見え、同じ聲がいつも同じ聲に聞えるのではない。その時の吾等が心的狀態によつて一々ちがふのである。

心こゝに在らざれば視れども見えず、聽けども聞えず食、へども其味を知らず。

といふは『大學』の中にある有名な語であるが、實際その通りである。外界から種々なる印象を受けることは事實であるけれども、その印象せらるゝ有樣は吾等自身の心の狀態によつて定まるのである。而して眼により、耳により、手足等によつて報せられたる所の凡てを吾等自身に統一することによつて、初めて經驗が成立つのであるから、吾等自身の心次第で、經驗の內容はいろ〳〵に變るわけである。外界に何物もなければ吾等の經驗は成立たぬけれども、吾等自身の心の活動がなければ、たとへ外界に如何なる物があつても全く無きに同しいといはなければならぬ。

斯く考へ來つて『心が境界を作る』とか『心が天地を作る』とかいふ語も尤もだと了解が出來るのである。しかし心が境界を作るといつても、外

人としての通有性

界の事實に立脚せずして、吾が心のみで勝手に作つたものは空想に過ぎぬ。又人々の心がそれ〴〵多少の異る所をもつて居ることは爭はれぬが、若し凡ての人に通ずる所のものが何もないならば、人生といふものは成立ち得ぬ筈である。されば各自の心に統一力をもつて居ることを認むると共に、凡ての人を通じて定まれる性質のあることをも認めなければならぬのである。此點に就て疑ひを起せば、道理とか道義とかいふものゝ確實性は盡く失はれてしまふであらう。昔希臘の詭辯派の人々の唱へた所が卽ちそれである。彼等の考へによれば人の智識は經驗によつて成立つのであるが、その經驗は人によつて各自に異つてゐる。吾が眼で見た通りの物が他の人に見えるか、吾が耳で聞いた通りの聲が他の人にも聞えるか。吾が眼と他の人の眼とちがひ、吾が耳と他の人の耳とちがふ以上は、誰も之を確め得るものはない。さすれば道といひ理といふも、果して人間に通じてかはらず、千萬古に一貫してかはらぬ左樣なものがあると斷定することは、どうしても出來ぬ筈である。畢竟多くの人の同意したことが正しいとも善いともなるので、若し多くの人を同意せしむる術を知つて居る人があれば、其人の主張が卽ち正しいとも善いともなるのだと、彼等は唱へたのである。卽ち正しいといふのは、多數を制する力のあるものに與へられた名である。絕對の道だの理だのといふものはないといふのである。所謂『勝てば官軍』主義に外ならぬのである。

勝てば官

詭辯派の人々は斯ういふ說を唱へて靑年の人々を動かし、多くの人を動すべき力といへば辯術の方はない、その辯術を學ばんとするものは吾が門に集れと誘つたのである。彼等は之によつて勢力と貨財とを併せ得ることに成功した。彼等が一種の懷疑說を唱へ、それより多數を制するものが卽ち正しいのであるといふ結論に到達したのは畢竟靑年を誘うて自己の門に

寂しい悟り

集まらせる爲の手段に過ぎぬのであるが、斯く最初から計畫を立てたのでなく、唯だ久しく世間の波に漂うて居る間に、知らず識らず詭辯派の人々と同じ結論に到達する者の多いのはまことに悼ましいことである。（序說參照）世の中は複雜であるから隨分しつかり立てた計畫でも狂ひ易い、況してそれ程の覺悟もなくて活きて居る者は、たゞ毎日意外の出來事ばかりに出逢つて、精も根も盡き果てゝしまふ。斯ういふ生活が相當に續くと『世の中は思ふやうにならぬもの』といふ一種の寂しいあきらめが出來て、あまり物事に驚かぬやうになる、あきらめも一種の悟りであらうが、あまりに寂しく痛々しい悟り方である。是は昔の笑話であるが、江戸の或る町で白晝に二人の武士が口論の末、刀を引拔いて果しあひを始めたので、往來の人は皆逃げ出し、その近くの店頭に居たものも皆奥へ逃げ込んでしまつた。ところが一軒の武器をあきなふ家の主人は、店頭に坐り込んで殆んど身動きもしずに見て居た。相手を斬り倒した一人の武士が彼の店へツカツカと入つて來て、『流石に武器をあきなふだけあつて、此の騷ぎの中に泰然自若として居たのは、感心だ』とほめた。褒められた主人は大に恐縮して『イエ逃げたくても腰が拔けて動けませんので……』と答へたといふ。如何なる事にあつても驚かず騷がぬといふ覺悟があつて冷然として居るのは結構であるが、寂しいあきらめの爲に感激性の無くなつたのは悲しいことである。

凡夫の眼に映ずる聖賢

斯く冷却した心から古來の聖賢の心事を臆測して、卑劣なる批評を加へるものが往々にしてある。釋迦も孔子も親しくあつて語りあつて見たら後世から想像するほど偉大なものではあるまい。久く時代を經る間に段々と箔をつけられて光り輝くやうになつたのであらう、といふやうな批評をする人も少くない。余なども佛敎の經典などが釋迦の弟子に語つた所をその

儘に筆錄したものとは固より信じて居ない。何物も久しい間には發達するのである。釋迦によつて敎へられた所が久しく印度國民の間に傳はり、之に就て更に深く究むる人が多く出て來れば、思想が次第に複雜になり又精密になつて、釋迦の觸れなかつた問題までがいろ〳〵に攻究せられ、又それに對する解決の出來たものも少くはあるまい。そういふ類のものまでが綜合せられて佛敎といふものを形作つてゐるには相違ない。しかし其等の凡ては釋迦の說かれた所を根柢として發達して來て居る事を思へば、一層釋迦の偉大なる事を感ぜざるを得ぬのである。儒敎と孔子との關係にしてもさうである。耶蘇敎の如きは、耶蘇自身に敎へを說いたのは數年に過ぎぬのであるから、固より單純なことであつたに相違ない。多くの深遠玄妙なる敎理は後世に至つて完成されたものであらう。しかし其等が皆耶蘇の人格と其の敎訓とを本として發展し來つたことを思へば、耶蘇其人の偉大さを疑ふわけにはゆかぬのである。

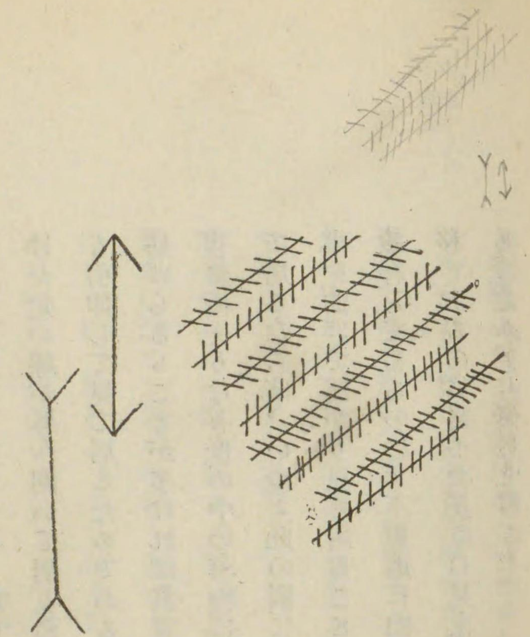
殊に悲むべきは聖賢の事業に對して、世を欺いて勢力を作つたものであるといふやうな批評を加ふる者の少からぬことである。『英雄人を欺く』などといふは輕薄なる文士の語にして、取るに足らぬものである。或は自ら神の子と稱し、或は天によつてこの世に送られたものと稱するものは昔も今も少くない。其等の中には世を欺いて自ら爲にせんとする者も無論あるにちがひない。又自ら斯くと信じて居ても、實際世を導き人を濟ふべき力のないもの、卽ち一種の空想家に過ぎぬ者も隨分あることであらう。しかし此の如きの類は久しからずして皆泯びてしまふのである。久しい生命を有する敎へは必ずや深く思ひ篤く信じ、如何なる危害の中に立つても動かぬといふ大決心をもつた人の心を源泉として出來たものである。若し眞實の心から出なかつた敎へが、久しく勢力を有し、數百千年の間多くの人

自ら輕んじ自ら侮つてはならぬ

がそれに欺かれて居たのだといふことを主張する人があれば、其人は人といふものを侮辱して居るのである。人といふものはそんなに淺はかなものではない。多くの人がいつ迄も欺かれ通して居るといふやうなことは有り得ない。斯ういふ事を主張する人も亦た凡ての人といふ者の中の一員である。卽ち彼は自己をも侮辱して平氣で居るのである。勿論久しく流行して居る中には隨分不完全な宗敎もある。しかしそれが久しく人の心を支配して居るのは、其敎への全部が僞りで充されて居るのでなく、其中に眞實なるものを含んで居るが爲と思はれる。余は天理敎といふものにあまり感服せぬ者であるが、しかし其敎祖として仰がるゝおみきといふ婦人の事跡を讀んで見て、いろ〳〵感服すべき事を見出した。殊に夫の愛が他の婦人に移つた時に深く自ら責めて、『自分の誠心が足らぬ爲に斯うなつたのである。之が爲に犧牲となつたアノ婦人は眞に氣の毒である』とて憎むべき人を却て憫んだといふ一事には深く感動した。斯ういふ人を敎祖とする敎へが、たとへ幾多の缺點を有するにせよ、人の心を支配する力をもつて居るのは更に不思議では無いと思つた。

人々が兎角に自ら輕んじ自ら侮るやうな念を起して、冷いあきらめに陷るのは、その人生を觀察するに當つて、眼の着け所が横に外れて居るためと思はれる。今

錯覺的の人生觀



此處へ出した圖は普通の心理學に於て錯覺を說明するに用ゐる、極めて有りふれたものであるが、右の方の數條の直線は皆並行に引いてあるのである。然るにそれが並行して居るとは見えず、餘程不規則に引かれたものゝ

如くに見える。これは眼が小い刻み目に妨げられて線に沿つて正しく視りことが出來ぬためである。其の左方にある二つの直線は同じ長さに引いたものであるが、左端にある線の方がやゝ長く見える。これは其の兩端にて開いた短い線が外へ開いて居るために、眼が之に牽かれて中の線を實際よりも引伸して見て居るためである。斯く極めて單純なる直線を見るのでさへ、妨げらるゝことが多ければ眞實の相を見ることは出來ぬのである。況注つ複雜極まりなき世の中の事物に接するに當つて、眼を枝葉の點にのみしくで居るならば、いつも此の圖に對して錯覺を起して居るやうな具合に、物事を曲げてばかり見て居ることになるであらう。右の方の圖の線は正しく並行してゐるのに、不規則に曲つたものと見える。左の方の二線は同じ長さであるのに異つた長さに見える。人生觀に於ても、斯ういふ間違が常に吾等の心を占領して居る。

貴い人の本性

釋迦は『一切衆生悉く佛性有り』といつた。一切衆生といへば賢愚長幼の凡てを含むのである。何人も佛と成るべき本性を具へてゐるから、努力次第では凡夫の境界を脱することが必ず出來るといふのである。孔子は『能く一日も其力を仁に用ゆる有らんか、我未だ力の足らざる者を見ず』といつた。何人も努力次第で仁を行ふことを得べきことを明言したものである。老子は『人は地に法り、地は天に法り、天は道に法る』といつた。何人も天地に法つて道に一致し得べきことは明である。耶蘇は『求めよ、さらば與へられ、尋ねよ、さらばあひ、門を叩けよ、さらば開かるゝことを得ん』とて何人も皆信の力によりて救はるべきことを敎へた。斯く世界のすぐれたる敎へを立てた人々は皆凡ての人を救はんとて起てる者である。凡ての人を救はんとして起てるは、凡ての人に救はるべき素質のあることを見究めたが爲である。是れ實に人の人としての本質を明にせるが故である。然

るに確乎たる覺悟もなくて世間に立ち、つまらぬ問題の爲に煩はされて、草疲れ果てた者が錯覺的の人生觀を立て、昔の詭辯派の力說したやうな勝てば官軍主義に陷り、多くの眞實なる敎へに對してさへ、世を欺いて勢力を得たものであるかのやうな解釋を加へるといふは、何といふ淺ましいことであらう。

人と物とを統一する力

前に引いた『中庸』の語には深い意義が含まれて居る。先づ內に省みて自己の心に存する統一の力を確めなければならぬ。統一せられたる心をもつて居るから人なのである。人と人とが相共に社會といふものを作つて居る。若し人と人との間に共通なる性質が無いならば、如何して社會生活が營まれやうか。又人は天を戴き地に載せられ、山河草木の間に共に生を營んで居る。若し人と周圍のものとの間に相融和一致する性質が全くなく、人は人、物は物とそれ〴〵異つたる力によつて支配され、それ〴〵異つたる原理によつて導かれて行くものであつたら、人は如何して天地の間に生を寄せ、萬物と共に住むことが出來やうか。斯く考へ來つて吾等は凡ての人を統一する力、凡ての物を統一する力、此の二つの力は畢竟一つの力であることに想ひ到らざるを得ぬのである。之を名けて、或は神といひ、或は天といひ、或は本體といひ、或は原理といひ、種々の解釋種々の說明が昔から加へられて居るのであるが、兎もあれ深く事物に就て考へる人は、何れも此の『唯一實在』に想ひ到らざるを得ぬのである。斯くて吾等は天地の間の凡ての物と共に活き、共に住んで居るのである。

物を惜む心

されば前の章に於て論じたやうに吾等は『自然を征服する』などゝいふ驕慢な念を起さず、吾等の研究の進むと共に自然の多くの力が『吾等の味方になつてくれたのだ』と考ふべきものである。吾等は自然の中に活きて居る。吾等を圍んで種々無量の物があり、種々無量の變化が起つて來る。

吾等は靜かに之を見聞し考察し解釋し、吾等の生活を安らかにし快くし、豐富にすべき途を講ずるのである。それで吾等は放逸なる心を以て此等の物に對せず、いつも深く物を惜む心をもつべきである。釋尊が入滅に際して諸弟子に敎へた中に、

少欲の人は則ち諂曲して以て人の意を求むること無し。亦た復た諸根の爲に牽かれず。少欲を行ずる者は心則ち坦然として憂畏する所なく事に觸れて餘りあり。不知足の者は富めりと雖も而も貧し。知足の人は貧しと雖も而も富めり。不知足の者は常に五欲の爲に牽かれて知足の者の爲に憐愍せらる。――佛遺敎經

とあるが、これは出家の人にのみ限られたる敎へではない。華やかな世間に立つて忙しい生活をして居る人に取つて特に適切なる敎へである。少しの物を靜かに玩賞して見て、はじめて其物の價値が分るのである。余が少年の頃に或る雜誌で募集した懸賞俳句の一等賞に、

一輪に見心あまる牡丹かな

といふのがあつたのを今でも記憶して居る。これは句として固より上乘のものではないが、その心持は面白い。多く植ゑ並べた牡丹が紅紫白黃とり〴〵の色に咲き亂れたのを眺めるのも壯觀であるけれども、たゞ一輪の白牡丹をしみ〴〵と見入つた時に、はじめて花の王たる氣品が知られて、いつ迄も見飽かぬやうに思はれるのである。

汗を流して働いたあとで、綠の滴る樹影に立つて涼風を受ける時、眞に涼味の貴さが分るのである。扇風機で起した風に絶えず當つて居るものは涼しいといふ感じも殆んどなくなつてしまふ。大正十二年の大震火災のあつた後、十月頃の事であつたが、或人が余に向つて『此頃大なる敎訓を得た』と語つた。その仔細を聞いて見ると『自分は毎年下野の鬼怒川の鮎を取

寄せて食べて居るのだが、近年はあまり美味とも感ぜられなくなつたので、是は何かの理由で鬼怒川の鮎の味が惡くなつたのだと思つて居た。ところが今度の地震で散々不自由な目にあつた後、久々で鬼怒川の鮎を食べて見ると、何に比べやうもなく旨い。それで近頃鮎の味が惡くなつたのではなく、自分の口が奢つて來たのだといふことを初めて知つた。實にそれは相濟まぬことだ、是から大に氣を附けなければならぬ』と其人は眞面目に話した。余は之を聞いて其人のために喜んだ。『君は地震にあつた爲に大なる幸を得た。地震は君に反省を敎へた。何でも物は惜んで用ゐなければならぬのだ、惜まずに用ゐて居ると物の貴さが分らなくなつてしまふ』といつたところが其人は『有難う』と心の底から感謝して居た。一體これは個人の問題ではない、社會の問題である。近世文明の進歩はまことに目覺しいものであるが、種々なる自然力を應用して吾等の生活を豐富にし華麗にすることに成功した結果、あまりにそれを浪費するの傾きを生じた。浪費する者は靜かに玩賞する暇をもたぬから、美しいものをも美しいと感ぜず、貴いものをも貴いと思はず、たゞ新しい欲望が增長して行くのみである。例へば亞米利加あたりで頻りに高い建物を作るが、地價の恐ろしく高い所では出來るだけ地面をよく利用しやうと努めるのは結構なことである。最近の科學的智識が充分に活用せられて、空中に人の住むべき場所を多く作るのは此の要求を充すために何よりの事である。しかし人の力でいくらでも高い建物が出來るといふことが知られると、『モット高くは出來ないか』といふ聲が起る。『イヤまだ高く出來るぞ、此の通りだ』といふ調子で段々高いのが建てられる。とう〳〵最近には地上から千何百尺とかいふのが出來るといふことであるが斯うなると實用には餘程緣が遠くなつて、高く建てられることを誇るのが主になるのである。之に費されたる努力と費用と

際限なき欲望

をモット實際的の事に使へば、多くの人が益を得るのである。此等は浪費時代の好い見本ともいふべきものであらう。

何物をも惜まなければならぬ。天地の間の何物も皆限りがある、それを惜まずに使ふといふのは無分別の甚しいものである。物を惜むことを知らぬところから、人は自然と共に住むものだといふことを忘れ、自然を征服して飽くまで自分達の欲望を滿足させやうなどゝいふ、愚なる考へを起すのである。欲望は自ら制することをしないで起るがまゝに任せて置けば、いくらでも強くなつて行くものである。滿足されるといふ時は決してない。彼のエヂプトにあるピラミッドなども實用的のものでは固よりない、さりとて美術的のものとも思はれぬ。それは昔の帝王が『王の力ではどんな事でも出來る』といふことを事實に現はして、自己の名譽心を滿足させやうといふ考へから、多くの奴隷を使役して作り上げたものと解釋されて居る。

人の創造力

斯ういふ法外なことをしても、その帝王の欲望はまだ滿足されなかつたに違ひない。物を惜む心のないものが得意の境遇に在ると、自分の勢力の及ぶ限り浪費をやる。それを同じく物を惜む心の無いものが失意の境遇に居て、目を聳てゝ見ながら頻りに憤慨して居る。さうして雙方共にイラ〳〵した氣分を以て毎日を送るのである。『物を玩びて志を喪ふ』といふは眞に此事である。

物を惜む心が更に人の力を愛惜するの念と結びついて來ると、多くの好い結果を生むものである。吾等の周圍にある物には大概人の努力が加はつて居る。その努力を決して輕んぜず、飽くまでも愛惜すべきである。『人は何物をも創造することは出來ぬ、唯だ變形するのみである』と說く人もある。成程それも一應道理のある說である。人が物を作るといつても決して無より有を生ずるのでなく、いづれも自然界の物を材料として作るのであ

る。學問とか藝術とかいふものこそは人の頭の中から生み出されるのであるが、それも自然界の事物を全く離れては成立たぬのである。斯う考へれば、人の力で何も創造し得られぬといふ説も尤もである。しかしながら一體一つの物が存在するのには形と質との二條件が共に必要なので、此の二條件は更に輕重なきものである。小い石片でも必ず丸いとか三角だとか、何かの形を具へぬものはない。形なくしてたゞ質があるといふことは如何しても考へられぬ。物があるといふのは形を具へてゐるといふことである。されば新しい形を與へるのは、卽ち存在の新しい意義を與へるのだといふべきである。酒の原料は米だと聞いて、米を久しい間嚙んで居たが少しも醉はなかつたといふ笑話がある。原料と製品とでは別のものである。人は自然界の事物を材料とせずして何物をも作り出せぬけれども、之に新しい形を與へ、之に新しい性質を賦與するために力を用ゐれば、新しい物が出來

文學美術に現はれたる創造力

上るのである。人に創造力があると解しても少しも不合理なことはない。

文學や藝術などに就ても、そこに人の創造力を認め得べきである。希臘のプラトーンは文學や美術は自然の事物の模倣にすぎぬといふ説を立てたが、それは大なる誤りである。若し模倣に過ぎぬならば繪畫や彫刻は寫眞術の發明によつて衰滅に歸すべき筈である。如何に寫生といつても物の姿をその儘に寫した畫といふものは無い。必ず寫す人の考へを以て取捨選擇をして、其の寫すべき部分を寫し、捨つべき部分を捨てるのである。蘇東坡が畫に題した詩に、

論レ畫以二形似一見二兒童一隣。賦レ詩必二此詩一。定非二知レ詩人一。詩畫本一律。

天工與二清新一。

とあるが、形をその儘寫すのが畫の本意ではない、その形の中に宿る所の精神を寫さなければならぬ。その精神を捉へることは畫く人の力によること

どである。されば富士山を寫したのは、富士の山一つを寫したのではなく、高山の秀靈の氣を寫したのであるから、寫眞の版畫とはちがふのである。前の章に引いた、歴史と詩とに關するアリストテレスの語は此處にも當てはまるのである。自然界の事物を材料としても、畫く人の創造力が確かに働いて居る。文學に於てもまたさうである。

人の力を輕んずるもの

さういふ特殊のもので無くても、例へば紙一枚ペン一本でも、自然界の物を材料として、それに人の力が加はつて出來て居るのである。されば吾等は人の力を重んずるといふ意味に於て之を大切にしなければならぬのである。物を濫費するのは人の力を輕んじ侮ることである。人として人の力を輕んじるのは、卽ち自ら輕んじ自ら侮るものといはなければならぬ。度々例證として恐れ入る次第であるが、明治天皇の御儉素な御生活は吾等に取つて最も大なる敎訓である。天皇は特別に御樂みと申すものもなく、唯だ歌を御詠みになることが御心を慰めたまふ唯一の道であつたと存ぜられる。然るに其の御歌を至て麁末なる紙に御したゝめになつて、それをボール紙の箱へ入れてお置きになつたと申すことである。天皇の唯一の御樂みであれば、たとへ千萬金を之が爲に費すとも不可なることは無い。それにまで斯く御儉素であつたといふは畢竟民の力を輕んじたまはぬ有難い叡慮に出るものと拜察せらるゝのである。紙一枚でも民の力に依らずして出來るものではない。民を以て國の寶としたまふ御心から、如何なる物をも節約して御用ゐになつたのであらうと考へると、吾等は唯々感激の外なき次第である。

如何に高遠なる理想を說いても、食はず着ずして生きて居ることは出來ぬ。物質を卑しむといふことは間違つて居る。然るに物質を卑しまず、各自の生活を出來得るだけ安穩に又豐富にして行かうとすれば、人の力を輕

んこ侮らぬといふ點に立脚して、各自に戒めあひ勵みあふより外はないのである。『人はパンのみにて生るものに非ず』といふ耶蘇の言に對して『しかしパン無しには生きられぬぢやないか』といふのは如何にも道理である。しかし其のパンを平和に公平に分配して、人生を意義あるものにして行くためには『パンのみにて生るものに非ず』といふことを忘れてはならぬのである。

第十二章　權利思想の根柢

物を重んずるといふことは畢竟人を重んずることである。凡ての人が共に受くべき自然の恩惠を自分が恣に多く受けてはならぬと反省するならば、如何に微細な物でも輕んずることは出來なくなる。又多くの物には人の努力が加はつて居るのであるから、物を輕んずることは人の努力を輕んずることになる。此點からも物を輕んじてはならぬといふ信念は作られる筈である。人の物を盗んではならぬといふ事も、要するに所有する人を輕んぜぬといふことが根柢となつて居るのである。たとへ微細なものでも盗むことは大なる罪である。何となれば其物を所有して居る人を無視することになるからである。

曾て余は朝鮮を旅行して居た時に斯ういふ話を聞いた。或る町の雜貨店の客の中にソット一つ二つの品物を竊んで逃げ出した者があつた。店員の一人がそれを見附けて後から追ひかけて行つた。二三町行つた所で捉まへて、品物を返せと談判したが容易に埒が明かぬので終に格鬪となり、店員はとう〳〵其男を組伏せて品物を取返し、突放して其儘歸らうとした。彼の男は起き上つて店員を呼び止めた。さうして『品物を取返したら貴君の方に損は無からう。私は斯んなに着物を汚して大分の損害を受けた。此の

返しても罪は消えぬ

損害を償つて貰はなければならぬ』といつたといふことである。是れは極端な話であるが、盜んで人に損害をかけたから罪になるといふのなら、それを返して損害を無くすれば、罪は消えたとも考へられるわけである。しかし眞面目に考へて見れば、盜んですぐ返しても其の盜んだ罪は消えぬのである。それは損害をかけたのが惡いといふよりも、寧ろ其の所有者を無視したのが赦すべからざる罪であるからである。

社會に於ける各個人の地位職業等にはそれ〴〵に差があるけれども、個人として互ひに認められ互ひに重んぜられなければならぬ。特に社會に大なる貢獻を爲した人の尊敬せらるべきは勿論であるが、前の章でも論じた通り、此の複雜なる世の中に於ては、相當な力量があつても之を現はすべき機會を得ぬ人も多くある筈であるから、たとへ顯はれたる働きをせぬ人とても妄りに輕んずべきではない。又現にあまり價値の無い人でも、一た

不輕菩薩

び志を立て努力を重ぬる時には如何なる進歩をするかも知れぬ。法華經の中に不輕菩薩といふ人の事が出て居る。此人は途上で行きあふ人毎に之を禮拜して、

我深く汝等を敬ふ、敢て輕慢せず。所以はいかん、汝等皆菩薩の道を行じて當に作佛することを得べし。

といつたといふ。凡夫と佛とは非常に懸隔があるけれども、佛も元は凡夫である、凡夫も皆佛性を具へて居る。されば修行次第で誰でも佛の境地に到達し得らるべきである。不輕菩薩は人々の具有せる佛性の貴きことを認めて、之を禮拜讃歎したのである。社會の凡ての人が互ひに禮拜讃歎しあふ心を以て相對するならば、不祥の事の起つて來やう筈はない。

是れは理想であつて、遽かに斯ういふ理想の實現は望まれぬであらうが、兎に角各個人は互ひに個人として其の存在を認められなければならぬので

物の所有

ある。既に各個人の存在が認めらるゝ上は、その努力の結果は勿論尊重されなければならぬ。人々が今日所有する所の物は、何れも努力の結果であつて、如何に微細の物と雖も努力なしに得られやう筈がない。(若し少しも努力せずして得た者があれば、それは正しく得たものでないから、社會の制裁が之に加へらるべきである。) それで其人の努力を社會が認める爲に、其人の所有は社會が保護しなければならぬので、之を犯すものは罪人と見做されなければならぬことになる。物を盗むといふは其物を所有する人を無視することで、若しそれが許されるならば社會の根柢はグラついてしまふのである。これは物の所有に就て考へて見たのであるが、勢力とか名譽とかいふやうな無形のものの所有に就ても同じやうに考へられなければならぬ。

但し如何に所有といふことが社會に認められて居るからとて『自分の物だから自分の勝手に使ふ』といふことを主張するならば、それは不當なる主張である。それには二つの理由がある。第一に如何なる物でも自分一人の努力によつて得られたものは無い、直接に間接に多くの人の力によつて助けられ、初めて之を得たのであるから、之を『自分の物』とのみ思ふのは僭越の次第といふべきである。第二には何人と雖も一人で生きて居るのでないから、人と共に生きて居るといふ用意を忘れてはならぬ筈である。若し群集の中へ入つて杖をむやみに振りまはし『自分の物だから自分が勝手に振りまはすのだ』といつたら、誰も默つて許しては置くまい。杖は自分の杖でも、それが人の頭に當れば其人の頭に瘤が出來る。之を周圍の人が許して置かうわけは無い。杖ばかりでは無い、凡ての物に對して同じ道理が考へられなければならぬ。金力でも勢力でも、それを振りまはして周圍の人に害を與へる場合には、之に對して嚴格なる社會の制裁が加へられ

自分のものといふこと

なければならぬのである。

此處に一つ問題が起る、それは親の物を子が讓り與へられるといふことを如何に解釋すべきかである。物を重んずるのは之を得んが爲に費された努力を重んずるのであるといふ議論から行けば、何の努力もせずして親の物をソックリ讓り受けることを認容するのは間違つて居るといふことになる。しかし親子を一つの生命の續きと見れば、此の非難は當らぬことになるであらう。例へば一人が七十まで生きたとして、此人が五十まで働いて資産を作り、殘りの二十年間何もせずに暮して居ても別に外から非難さるべき筋はない。又モット短い間でいへば、一日の内で朝から午後の四時頃まで働いて、その所得によつて四時から寢るまでを飲食と休養とに費しても、誰も之を非難する者はあるまい。此の關係をモウ少し延長して、子は親の生命の引續きであると見れば、その前半の生命たる親が努力した結

讓られた物

果を、後半の生命たる子に讓つて、子がそれを享有するといふことが少しも不思議ではないのである。斯く親子を一つの生命の續きと見るといふ考へがなく、親は親である、子は子であると全く別に考へるならば家族關係は破壞されてしまふであらう。

更によくならなければならぬ

斯く考へて見れば親の物が子に傳はるといふことに何の不思議もなく、外から兎や角と干渉を加ふべき理もないのである。しかし親より子、子より孫と引續いたる一の生命であるとしても、其間に絶えざる變化のあることを認めなければならぬ。一切のものは盡く變化する、就中人の心は動いてやまぬものである。されば進歩の止む時は卽ち退歩の始まる時である。同じ狀態で居るといふことは決してない。子は親の生命の續きであるが、自己の努力によつて更に善いものにして之を其子に傳へるといふ覺悟をもたなければならぬ。財産と雖も親より傳へられたものを其儘に守つて居る

のでなく、親よりも更に多くの貢献を社會に爲し得るやうに此の財産を活用せんとの心懸けがなければならぬ。されば讓られた財産を唯だ守つて居ても別段さしつかへは無いやうであるが、親の恩に報ずる道はそれでは立たぬわけである、又人類として意義ある一生を送るといふ上からいつても、それでは濟まぬことであらう。幸運に狎れて自ら省みぬものは、永く其の幸運を享受することが出來ぬといふことを知らなければならぬのである。

天分を空しくしてはならぬ

是れは啻に財産のみに限らず、自分のもつて生れた天分に就ても、同じやうに考へる必要がある。健全なる心と身とをもつて生れた者、すぐれたる理解力創造力をもつて生れた者はいづれも其の父祖に對して感謝すべきである。又折角優れたる天分をもつて生れても、それを萎靡させてしまふやうな境遇に置かれる人も少からぬのであるから、其の天分を發揮し得る境遇に在るものは、之に對しても深く感謝しなければならぬ筈である。「伊尹のことを前の章に引いたが、彼は其の身に重大なる責任を負うて居るといふ自覺から、天下の爲に力を盡したといふことである。初め彼は有莘の野に耕して世に用ゐらるゝことを望まなかつた。湯王が彼を聘せんが爲に使をやつた時に、

我豈に畎畝の中に處り、是に由りて以て堯舜の道を樂むに若かんや。

とて、出て仕ふることを肯じなかつた。しかし湯王が三たび使を遣はして彼の奮起を促すに及んで彼は遂に決心した。彼は慨然としていつた。

我畎畝の中に處り是によりて堯舜の道を樂まんよりは、吾豈に是の君をして堯舜の君たらしむるに若かんや。吾豈に是の民をして堯舜の民たらしむるに若かんや。吾豈に吾が身に於て親しく之を見るに若かんや。天の此民を生ずるや、先知をして後知を覺さしめ、先覺をして後覺を覺さしむ。予は夫の民の先覺なる者なり。予將に斯道を以て斯民を覺さんとす。

予が之を覺すに非ずして誰ぞや。

此の心は眞に貴むべく敬ふべきものである。自分が優れたる天分をもち、その天分を發揮し得るやうな境界に在るのは大なる幸であるが、その幸を私してはならぬ、この幸を普く世間の人に頒つことに努むべきである。

努力の貴さ

又たとへ優れたる天分を有する人でなくても、一つの事に全力を注いで努むるならば、必ず相當の効果を收め得べきである。而してその全力を注いで努力したことは、必ずや社會に何等かの貢献をして居るのである。顯要の地位に在るものが特に大なる貢献をして居るとは斷せられぬ。まことに畏れ多い例を引くやうであるが、余は先年の所謂虎の門事件に於て此事を痛感した。今の陛下がまだ皇太子であらせられた時、帝國議會の開院式に臨ませらるゝために虎の門を御通過になつた時に、狂人があつて御召の自動車に對し發砲した。若しあの時に御怪我でもあつたなら、國民一般の心痛はどれ程であつたか知れぬ。しかし此の危急の場合に當つて總理大臣も何の御役にも立たぬのである。大將も元帥も何の御役にも立たぬ。日本第一の富豪の力でも、日本第一の學者の力でも此の危急の場合をどうすることも出來なかつた。その時に御召の自動車の運轉手が咄嗟の間に決心して、全速力を以て疾走し貴族院の玄關に疾風の如くに乘りつけた。此の機宜の處置のために、彈丸は纔かに自動車の窓を抄めたのみで何の御怪我もなかつた。國民は安堵の胸を撫でた。此の危急の際に處して、國民の凡てに安堵の念を與へるといふ貴い働きは、大臣にも大將にも大富豪にも大學者にも出來ないで、身分も卑く年も若い一運轉手によつて果されたのである。

人の力は貴いものである。人々は互ひに重んじあひ敬ひあはなければならぬ。自ら凡夫であるとか罪の子であるとかいつて、反省し懺悔すること

人を相手にせぬ

も勿論大切であるけれども、唯だ悔んだり歎いたりして居ても役に立たぬ。凡夫の境界を離れ罪の子の狀態から脫却することを努むるより外はない。その力は吾等自身に具はつて居るので、各自の仕事に全力を注いで居る間は確かに罪の子では無くなつて居る。余は先年北海道へ行つて數ヶ所の炭坑を歩いて見たことがある。或る炭坑では草鞋をはきカンテラを提げて坑內へ深く入つて見た。兼て話には聞いて居たが、見るのは此時が始めてなので、眞暗闇の中でコツ〳〵と働いて居る坑夫達が殊に氣の毒に思はれた。どんなに苦しくても明るい所で働いて居られる者はまだ宜い、斯んな暗い所で毎日を送らなければならぬのは眞に不幸なものであると大に同情した。それで坑外へ出てから一人の坑夫頭に向つて自分の感じた通りを話した。その時坑夫頭は笑つて『初めて坑內へ御入りになつたのでは、そんな感じもなさつたのでせうが、慣れて見れば何の事もありません。私共は事務所の人達の方が餘程お氣の毒だと思つて居ます』といつた。その仔細を聞いて見ると、『事務所では多勢一つの室で仕事をして居るのだから、自然上役の人の顏つきや眼つきを氣にするやうになるでせう。何か御機嫌に障りはしないかと思つてビク〳〵しながら仕事をして居るのはお氣の毒なものです。私共は人間なんぞを相手して居るのではない、大きな石の壁を相手にして毎日コツ〳〵とやつて居るので、誰に氣兼をするにも及ばない。身體は苦しくても心に苦勞はありません』と彼は昂然として語つた。

此の坑夫頭のいつた事は確かに眞理を含んで居る。人を相手にせずに自分の仕事に全力を注ぐ時は、心にいつも餘裕がある。西鄕隆盛が『人を相手にせずして天を相手にすべし』といつたのは有名な語であるが、佐藤一齋は『言志錄』の中に於て、『人に示すの念』があつてはならぬ、『天に事ふるの心』をもつて何事でもしなければならぬと說いて居る。實際どんな仕

神に近づいて居る時

事でも魂を打込んでやつて居る時には、人が見て居るか見て居ないかなどゝいふ事を顧慮する暇はないのである。其時こそは凡夫でもなく罪の子でもなく、神に近いものになつて居るのである。唯だ吾等は此の如き時間が甚だ少く、兎角周圍に心を惹かれることのみ多いのを悲しく思ふものであるが、努めてやまなければ此の如き『神に近づいて居る時』が少しづゝでも増して行くにちがひ無い。たとへ人を羨んだり世を恨んだりして、心に煩悶の多い人でも其の仕事に全力を注いで居る刹那だけは凡て其等のことを忘れて居る。即ちその間だけ解脱を得て居るのである。斯ういふ時間を多くすることは自ら救ふ道である。自ら罪の子と稱して救ひを外に求めたとて、それで救はれるものではない。

人と人との間に感激の情が起ると同じやうに、人と其の仕事との間からも感激の情は起る筈である。唐の魏徵の詩に、

感激の情

人生感ニ意氣一。功名誰復論。

とある。實際意氣に感ずる時には、功名も富貴も全く忘れて、唯だ己を知る人の爲に盡したいといふ考へのみになるものである。孔明が劉玄德に懇請せられて草廬を出たのも全くそれである。自ら『是に由て感激して先帝に許すに驅馳を以てす』といふは能く其時の情を悉して居る。しかし感激といふことは人に對してのみ起るものではない。自分の努力した効果が仕事の上に現はれて、努力したかひが有つたといふことを強く感じた時には宛も吾が心を知る人にあつて慰められたと同じ感じが起つて、損も得も全く考へぬやうになるものである。植木屋が久しく丹誠して立派に仕上げた木を人に賣る時は、宛ら愛する娘を嫁入らせる時と同じやうに、嬉しくもあり又物寂しくも感ずるさうである。或る植木屋は自分の賣つた木の手入れをするのに呼ばれた時は、別れて居た子に久しぶりで逢ふやうな感じだ

と語つた。又或る植木屋は永年手がけて居た欅の盆栽を某といふ人に賣つたが、その人の家は大正十二年の大震火災に罹つて散々の體になつた。植木屋はそれと聞いて早速に駈けつけたが、幸にも自分の賣つた盆栽は無事に庭の一隅に置かれてあつた。彼は其時の感じを語つて『あんまり嬉しくて思はず涙が出ました』といつて居た。植木などは生命のあるものであるから宛ら人のやうにも思はれたのであらうが、たとへ生命の無いものでも熱心を籠めて作りあげた物は、自分の子のやうに思はれるに違ひない。これは或る造船所で聞いた話であるが、先年軍備縮小會議の開かれた時に、その造船所では海軍省の命によつて立派な軍艦を作つて居た。ところが會議の結果として其の軍艦は破壞されることになつた。それで未完成のまゝで造船所から海軍省の方へ引渡したのであるが、壞すために渡すのであると思ふと、造船所の人々は何ともいはれぬ悲愴の感がしたさうである。職工の中には涙を目に一杯湛へて見送つて居た者も少くなかつたといふか實に尤もなことである。それは自分達の努力が空に歸したといふ遺憾の念ばかりではなく、自分達の努力の中から生み出された軍艦を壞す爲に手放すのは、弟か子を殺しにやるやうに思はれて濺いだ涙にちがひない。

斯ういふ情があつてこそ立派な物も出來るのである。多くの發明や發見も皆此の如き淳なる心の動いて居る時に出來たものであらう。三條小鍛冶宗近が刀を鍛へた時に、稲荷の神が現はれて向鎚を打つたといふ傳說があつて、謠曲などにも作られて居るが、實際其技に魂を込めてやる時には、全く平生の自分とは異つた人となり、自分ながら不思議と思はれる程の力が現はれるのであるから、神が助けたのだと思ふのも無理ならぬことである。吾等は斯る貴い心の働きによつて出來た多くの貴い品を傳へられ、多くの發明や發見によつて惠まれて居るのである。カントが

感激なければ偉大なるものなし

感激なければ人生に偉大なる何物も無し。

といつたのは至言である。人が自ら罪の子として反省することは宜いが、たゞ罪の子たる一面のみを見て自ら侮つてはならぬ、人には斯る貴い一面があるのである。

近世文明と十字軍

近世歐洲文明の發達はまことに目覺しいもので、たとへそれが幾多の弊害を伴つたとしても、人の力の輕んずべからざることを示すに於て遺憾なきものといはなければなるまい。その發達の徑路を考へて見ると、人が自ら重んじ自ら勵むことの如何に大切であるかをよく證據立て居る。前の章にもいつたことであるが、近世の文明は十字軍の後に於て漸く興つて來たものである。元來此の十字軍といふものゝ起つたのは基督敎の墮落を證するものといはなければならぬ。基督敎は耶蘇が死んで後幾くもなく歐洲へ傳はつたのであるが、最初は羅馬政府の壓迫の爲に容易に敎勢を張ることが出來なかつた。此の如くにして三百年許をすぎ、コンスタンチヌス帝が之に歸依してから次第に盛になり、終には歐洲人の精神を支配する最も大なる力となつた。是は一には基督敎そのものゝ實力によるものである。當時地中海の周圍に住んでゐた諸民族の間にいろ／＼の宗敎があつたけれども一も基督敎に及ぶものはなかつたのである。善いものが最後の勝利を得たのは少しも不思議ではない。しかし基督敎が三百年の間多くの壓迫に堪へ多くの犧牲者を出したといふことが、後に大なる力を作るべき一の原因であつたことをも考へなければならぬ。其の犧牲となつて悲慘な最期を遂げた人々は、眞に基督敎徒全體の大恩人といふべきである。其後羅馬帝國の勢が衰へても基督敎の勢力は少しも衰へず、益々盛になつて行つたのであるが、その旺盛時は卽ち其の墮落の端を發する時であつた。前に引いた孟子の語の『憂患に生きて安樂に死す』といふは眞に動すべからざる名言で

十字軍の起る前

ある。

羅馬法王を頭に戴く基督教徒は自らその教を稱して『カトリック』といつた。カトリックとは唯一の義である。卽ち此の地上に於ける唯一の教で凡ての人は之に歸依すべきものといふのである。さうして帝王の保護の下に宗教會議を開き、その會議に於て定めたる教義は教徒たる者の絕對に服從すべきものとした。久しき歲月を經て羅馬法王の勢力が益々强くなるに及んでは、學者の研究の結果が萬一にも教義の中の一項をでも覆すことがあれば、法王及び教會の權威を殺ぐに至らんことを恐れ、有らゆる力を用ゐて自由研究を抑壓した。斯くして思想の自由を奪はれた結果、希臘以來傳はつたる活動的の性質は次第に弱められ、一般に頗る沈滯したる氣分となつて來た。其上に羅馬帝國の統一的勢力が緩んで來た結果として、封建制度が發達した。封建制度は一般人民をして領主並に武士の保護に依賴する氣風を長ぜしめ、自ら努め自ら活きるといふ意氣を銷耗せしむるやうになつた。又互ひに狹い領土內に立て籠つて互ひに睨み合ふやうな偏狹な氣風をも長ぜしめたものである。斯る沈滯したる世の中に淸新なる氣分を作り出す爲には、何か大なる刺激を要する。十字軍の起つたことは其の刺激として充分である。

十字軍の失敗

十字軍は失敗であつた、その失敗が全歐洲に大なる刺激を與へて、新しい時代を作る機運を起して來た。十字軍の起つた理由は一通り筋が立つて居る。エルサレムに在る耶蘇の墓は當時異教徒の管理の下にあつた。聖蹟巡拜といふことを信仰上の最も大切なる事と考へて居た當時に於て、最も神聖なる耶蘇の墓を異教徒の手に委ねて置くといふ法はないといふのは尤もなる議論である。如何なる艱苦を冒してもそれを基督教徒の手に取り返さうといふ主張が全歐洲を動したのも一應は道理がある。しかし能く考へ

て見ると、聖蹟巡拜が信仰上最も大切な事でなく、信仰は各自の心を淨くするために最も力あるものでなければならぬのである。『神は死し者の神にあらず、生る者の神なり』とは耶蘇の自ら明言したる所である。又基督教徒たるものが昔羅馬の壓迫に堪へて三百年を送つた時の半分だけの信念と勇氣とをもつて居たなら、異教徒の間に基督教を弘めて平和の間に耶蘇の墓を取返すぐらゐの事の出來ぬ筈はない。基督教は彼の異教徒の奉ずるマホメットの教よりも確かに優れたる教である。その優れたる教をもつて異教徒と鬪ふことが出來ずに武力に訴へなければならぬといふのは、彼等自身の信仰の墮落してゐることを告白するものである。『凡て劍を執る者は劍にて亡ぶべし』と耶蘇のいつたことを彼等は皆忘れて居たと見える。

果して十字軍は失敗に終つた。一〇九六年から一二七二年まで凡そ百八十年を費し、全歐洲の各國民が參加したる大規模の計畫が全く失敗に歸し

矢敗が大なる利益を生んだ

て聖地を取返すといふ目的が達せられなかつたのは、彼等に取つて何よりの良い教訓である。人數は多くても要するに烏合の衆であつて統一的に訓練されたものでないから弱い。それも皆が熱烈なる信仰によつて集つたのであれば強いが、之に參加したる國王や諸侯等の動機は區々であつた。或者は大なる勢力を得たいといふ名譽心のために、又或者は隣國に負けまいといふ競爭心のために參加したので、要するに雜然たる群集が種々雜多の心を以て出陣したのであるから、成功を見なかつたのも當然である。如何に神聖なる十字架を徽章として進んでも、又たとへ羅馬法王が勝利を神に祈つてくれても、其等は何の役にも立たなかつた。此の失敗は彼等に多くの事を教へた。先づ第一に自分の努力が足りなければ神に助けを祈つてもダメであるといふことが分つた。又いかに多くの人が集つても、眞劍にやらなければ成功の得らるゝものでないといふ事も分つた。又彼等は昔から

世界の最も優秀なる國民であると信じて居たものであるが、それが自分等より少數な東洋の未開國の者に負けたのであるから、是はウッカリしては居られぬといふことを痛切に感じた筈である。それに今までは封建制度によつて養はれたる偏狹なる氣分から、隣國同士互ひにひがみ嫉むといふ有樣であつたのが、兎も角も共に遠隔の地まで出かけて、艱苦を共にしたのであるから餘程互ひの心が打解けて、男らしい寛い心持になつた。それに遠くへ行つて異つた天地を見、異つた人に接して來たことは、氣宇を濶大にするために少からぬ効果があつたに違ひない。

此の十字軍によつて何れの諸侯も非常に疲弊し、封建制度の崩壞すべき端緒が開かれたのも、新時代を作るためには何より好い事であつた。斯くて各國民は『自分等のことは自分等の力によつて處理するより外はない』といふ決心をしなければならぬ場合となつた。宛も此時古代文藝の復興の

機運が南歐地方に動いて居た。羅馬法王の勢力はグレゴリ七世（一〇七三—一〇八五）インノセンス一世（一一九八—一二一六）の在職時代に於て絶頂に達し、それからは下り坂と見るべきである。隨て教會の保護によつて發達したる所謂スコラ哲學はトーマス（一二二七—一二七四）を以て絶頂とすべきである。一三二一年に死んだ詩人ダンテは大體に於てトーマスの學說を奉じたものといはれて居るが、彼の主張には既に舊い型を脫却して自分の誠の心を以て神に接せんとする强い要求が現はれて居る。一般の思想界はもはや羅馬教會を中心として出來上つた教理や學說では滿足せず何等かの新しいものを求むるやうになつたのである。されば此より少し以前から南歐の地に於て少數の學者の間に試みられて居た希臘羅馬の古典の研究が漸く世間にその影響を及ぼす樣になつて來たのも不思議ではない。古典といつても其中に充滿して居るものは『人の力で何事でも出來ぬ事は

ないと』いふ活々としたる思想である。斯ういふ思想が時代の要求に應じて擴がつて行つたのである。レオンチウスが伊太利のフロレンス市にホーマアの詩を講じたのは一三三五年のことで、此頃より古典の中に含まれたる思想が漸く南方歐洲を動かし、漸次北に及んだものと見て宜いであらう。

自彊不息

希臘羅馬の古典の中に汪溢せるものは現世を重んじ活動を貴び、自ら働き自ら活きなければならぬといふ思想である。此の思想を以て天地に對する時、天地間の凡ての現象は皆吾等の努力を促して居るやうに見えるのである。易の中に、

天行は健なり君子以て自彊して息まず。

とあるは正しく此義に一致して居る。希臘羅馬の諸賢人は何れも眞に自彊不息の人であつたのである。されば古典の精神が世の中に弘まれば、人々は古典の研究に滿足せず、更に進んで自ら新なるものを作り出し、自己の日々の生活を新にして行きたいといふ要求をもつやうになるのである。此の新潮流と十字軍の結果として生れた所のものとが正に合致したのである茲に盛なる活動時代を現出したのも道理ではないか。

活きた宗教

此の如き機運が動いて來た以上は、宗教界も昔の如き沈滯を許さぬは當然のことで、一三八三年には英國に於ける宗教改革の先鋒たるウヰークリフが英譯の聖書を出した。此まで用ゐられたものはラテン語の聖書であつて、讀む者も聞く者も其の意義を解せず、宛も今迄の吾が國に於ける僧侶の讀經のやうな有樣であつた。それが現代の活きた國語に譯せられたのは秘密の門が開かれて活きた宗教の現はれ來るべき第一歩と見なければならぬ。此より二十餘年の後にはボヘミヤの僧ヨハン・フツスが焚刑に處せらるゝを辭せずして法王と爭ひ、其の一黨は侮るべからざる勢力となつた。有名なるオルレアンの少女ジャン・ダルクが英國軍を打破つて包圍を解い

たのは一四二九年の四月のことであるが、此の一少女が斯の如き不思議な働きをしたのは偏に信仰の力に依るものである。高僧碩德でもない、いはゞ無學に近い一少女が信仰一つを以て祖國を救はんが爲に奮起し、多勢の男兒も其の指揮に從つて懸命の努力をしたといふは、此の新時代にして初めて見らるべき事である。羅馬法王の援助の下に國王や諸侯が力を協せた十字軍の不始末を相對比して甚だ興味の深い出來事である。

文藝復興時代

斯く古典研究が盛になつた結果として、活き活きとした氣分が世間に漲り、潑剌たる生氣を有する學問藝術等が起つて來たので、此の時代を文藝復興時代と呼ぶのであるが、此の時代に出來た建物を見ても、よく時代精神が現はれて居る。其の前の時代に出來た所謂ゴシック風の建築は柱も太く窓も小くて、何となく落着きのあるドッシリとしたものであるが、文藝復興時代のものになると軒が高く柱が比較的に細く、窓は廣く明いて居て何となしに地上のものが天に向つてスーッと伸びて行くやうな氣分を現はしたものである。又ミケランジエロの彫像の如き、いかにも此の時代の勃興的氣分をよく現はし出して居る。ミケランジエロ（一四七五―一五六四）は實に此の時代が生んだ一大天才である。彼の高潔なる性格は彼の手に成れる繪畫、彫刻、建築及び詩作に於て何れも最も鮮かに現はれて居る。今もフロレンスに保存せらるゝダウ井ドの彫像は殊に有名なもので、吾が國にもその寫眞は隨分流布して居るやうである。神田あたりの街頭を歩いて見ても、その版畫は方々で見受けるが、段々寫し傳へらるゝ間に次第に損はれて行くにちがひないけれども、如何に損はれても髣髴として原作の俤を偲ぶことは出來る。彼が投石を以て巨人ゴリアスを倒さんと氣負うて立てる姿は『人の力で出來ぬものは何もない』といふ此の時代の精神を活現したものゝ如くに見える。

正義の觀念

新時代は斯くして作られた。人の力の貴むべきことを信じ、人の力を以て如何なる困難でも越えられぬことは無いと信じたる新時代の歐洲人は自ら貴ぶと共に他の人を貴ぶことを知つて居た。一人の努力が全體を引立たせる、一人の緩みが全體の緩みとなる。譬へば暴風雨に濤の湧き立つ大洋に乘り出した船のやうなものである。此の船の一枚の板、一本の釘でも全體の運命を制する力をもつて居る。小さな隙間から全體の危險が生ずるのであるから、何れの部分も大切なものと考へられなければならぬ。斯ういふ考へが所謂自治精神の根柢になつて居るのである。人は皆貴い、人の努力は皆それ〴〵の價値をもつて居る。互ひにそれを認めあひ、互ひに重んじあひ敬ひあふことが社會の健全なる發達の元となる。隨つて自ら不正を他の人に加へることを愼まなければならぬと共に、他の人の不正を許してはならぬ。不正を許すのは卽ち不正を認容することになる。社會に不正な事が行はれて、それが何等の制裁をも受けず、その儘に認容せらるゝことになれば、誰も眞面目に努力しやうといふ者は無くなる筈である。されば一人の不正をも許さぬといふことは、社會を健全に保つために最も肝要である。不正を寬恕して咎めぬといふは高尙な事のやうであるが、それは社會の健全なる發達を妨ぐる所行であつて、卽ち社會の一員たる責を果さぬ者といふ非難を免れぬのである。これが正義の觀念の基礎となる所の思想である。

社會の一員として吾等は互ひに努力しなければならぬと共に、互ひの努力の貴さを認めあはなければならぬ。又其の努力の結果を尊重しあはなければならぬ。茲に於てか他人の權利を認むると共に、自己の權利を主張することの必要を生ずるのである。他人を犯してならぬと共に、他人に犯さるゝことを認容して置いてはならぬのである。自己の權利を主張すること

小問題か大問題か

は社會に不正の行はるゝことを防ぐために最も必要なるものである。『自分が不正なる取扱ひを受けて居る』と考へると問題は至て小い。それは自分一人忍んで居ればすむ問題である。しかし此の社會に於て不正が行はれて居て、それが其儘に許されて居るのだと考へれば、決して小い問題ではない。自己の爲と考へるか、社會の爲と考へるか、要するにこれは心の中のことである。佛敎の如きは慈悲忍辱といふことを主とする敎である。けれども、

惡を許してはならぬ

法を壞る者を見て置て呵責し駈遣し擧處せずんば、當に知るべし是人は佛法の中の怨なり。——涅槃經

といふ敎へさへある。『法を壞る者を其儘に許して置いてはならぬ、許して置く人は佛法の敵と見做さるべきである』といふのは餘りに嚴に過ぐるやうであるが、惡を許して置くといふは善を貴ぶ心の足らぬものである故に斯く嚴しく戒められたのである。されば又、

慈無くして詐り親むは是れ彼が怨なり。能く糾治せんは是れ護法の聲聞にして眞の我が弟子なり。彼が爲に惡を除くは即ち是れ彼が親なり。

——涅槃經

ともいつてある。他人に不正があれば之を許さずして呵責し、その反省を求むることが眞の慈悲である。それを敢てせずして外面だけ平和にして居るのは却て彼の仇となるものであるといふのである。

世間の凡ての權利を主張する人が斯ういふ精神でやつて居るのではない中には全く利己的の考へから出たものもある。しかし互ひに權利を認めあふといふことの根本精神は此處に在らなければならぬ。明治天皇が憲法を御發布になつた時の上諭に、

朕は我が臣民の權利及財産の安全を貴重し及之を保護し、此の憲法及法

律の範圍内に於て其の享有を完全ならしむべきことを宣言す。

とあるが、それは前にも引いた通り『朕が親愛なる所の臣民は即ち朕が祖宗の愛撫慈養したまひし所の臣民たるを念ひ、其の康福を增進し其の懿德良能を發達せしめんことを願ひ』といふことを前提とせられてのことである。吾が國に於ては昔から人民を稱して『おほみたから』といふ語がある。即ち國の爲に大なる寶であるとの義であつて、其人の地位身分の如何を問はず、何れも人として尊重せられなければならぬ者と考へられて居たのである。明治天皇が憲法を制定し、吾等に自治を御許しになつたのも畢竟吾等の凡てを『おほみたから』と見そなはしての事と拜察される。

おほみたから

近世歐洲の文明には幾多の缺陷があるとしても、人々が必死になつて勵みあひ、人々の具有せる能力を遺憾なく發揮し來つたる點は眞に貴むべきである。其等の事實は吾等凡てに向つて『努力の空に歸せぬこと』を示し非常に心强い感じを起させるものである。而して此の如き必死の努力は人々の權利が認められ、互ひに犯し犯されぬことの確實に保證せらるゝ社會にして初めて出來ることである。人々は其の具有せる能力を充分に發揮して、社會の進歩に貢獻しなければならぬ責をもつて居るけれども、社會に正義が行はれずして、切角能力を發揮しやうとしても常に周圍からいろいろの支障を受けるやうであれば、如何にあせつても悶いても、その責を果すことが出來なくなる。英國の政治家にして文士たるエドマンド・バークが

歐洲近世思想の長所

凡ての人をして愛國者たらしめんとするには、先づ愛するに足るだけの國となつて居なければならぬ。

といつたのは道理ある言である。周圍が如何に頽廢して居ても、其中に立つて屹然として動かぬといふ人があれば、それは立派なものであるけれど

も、凡ての人に斯ういふことは望まれぬ。されば人々をして各その能力を發揮し、各その責を果させんが爲に、社會は其の權利を認め、各人其權利を主張し得る道を開いて置かなければならぬ筈である。斯ういふ健全なる社會を作り上げるために努力することは最も必要である。近世歐洲の文明は必ずしも理想的のものではないが、常に此等の點に注意が向けられて、人々が互ひに重んじあひ尊びあふといふ習はしが作られたことは、吾等の大に學ばなければならぬ所である。此の根本に着目せず、互ひに權利を爭ひあふといふ枝葉の邊のみを見て之を學ばんとするは誤れるの甚しきものといはなければならぬ。

第十三章　社會の制裁

外に向つて發展するのは勿論望ましいことであるが、內に於て充實する

所なくして、外に發展するといふことは出來ぬ。たとへ運よくして外へ延びることが出來ても、それが實力に依らずして幸運に依るものであれば、決して永續きのするものではない。露西亞が東洋方面へ向つて發展し來た勢はまことに恐ろしいものであつて、彼等は『世界の一大怪物』として各國民の眼を側てしめたのであるが、世界大戰爭の最中に內亂が起つて、其の勢力は頓挫した。今にして回顧して見ると、彼等はあまり發展しすぎて居たのである。彼等は東洋方面へ向つて伸びて來るのに極めて都合の宜い所に其の立脚地をもつて居た。さうして英佛其他が南へ寄つた方で勢を爭つて居る隙に、獨り北の方で手を伸し足を伸すことが出來た。それ故に彼等は其の實力以上に發展が出來たのである。其處に大なる無理があつたのである。內に充實したる力を蓄ふるの用意が欠けて居たのである。一朝にしてあの大變化を來したのも更に不思議なことではない。易に『霜を履み

て堅氷至る』とあるのを『文言』の中に於て解して、

積善の家には必ず餘慶あり、積不善の家には必ず餘殃あり。臣其君を弑し、子其父を弑するは一朝一夕の故に非ず、其の由來する所の者漸なり。之を辨じて早く辨せざるに由る。易に曰く、霜を履みて堅氷至ると、蓋し順なるをいふなり。

とあるは深く味ふべき言である。

ウエリントンと童子

彼の有名なるワーテルローの戰爭に於てナポレオンを打破つて武名を世界に馳せたウエリントンは、その前日部下の將校が『將軍心を安んせよ、吾等は吾等の務めを盡すことを知る』との一言を聽いて、充分の自信を以て戰場に臨んだといふことであるが、英國民は非常なる熱心を以てウエリントンの凱旋を迎へ、彼は得意の絶頂に在つた。彼は遊獵に出ることを何よりの樂みとしたが、或時例の如く獵り暮しての歸途、フト或る牧場の側へ出た。そこには木柵がグルリと結ひ廻してあつた。むかふへ通り抜けるのに牧場の中を横ぎれば餘程近道になるので、彼はヒラリと木柵を飛び越えて牧場の中へ下りた。二三歩行きかゝると『お待ちなさい』といふ聲がした。振返ると其處には十二三歳の童子が立つて居た。彼の童子は眞面目な調子で『其處を通つてはいけません、後へ御戻りなさい』といふ。ウエリントンは笑ひながら『左樣か、しかし余はウエリントンだ』といつたが童子は更に驚いた樣子もなく『ウエリントン樣でも誰でもいけません。私は主人の命令によつて此處の番人をして居るのです。主人の許しを受けない人を通すことは出來ません』と凛とした聲を以ていつた。之を聞いたウエリントンは思はず感歎した。彼は銃を側へ投げ出し。ツカ〳〵と其の童子の傍へ寄つて、大きな手を彼の頭にのせ『お前はよい兒だ、よくそれだけの事をいつてくれた。余はワーテルローの戰爭で佛軍を打破つて名譽の

枝葉と根柢

勝利を得たが、決して余の力ではない吾が英國民の力だ。吾が英國民は斯んな小い子までが能く自分の責を果すことを知つて居る。此の貴い國民の力によつて勝つたのである』と、さも滿足したらしくいつて、彼は又元の柵を飛び越え、後へ戻つて行つたといふことである。

實にウエリントンが言つた通り、大將一人の力で勝つたのではない、その國民性の發露が大なる勝利となるのである。軍隊の訓練のみに力を用ゐたとて、國民全體の意氣精神が充實して居なければ眞の勝利が得られるものではない。雲を衝いて茂つてゐる大きな樹は土の中に根をもつて居る。その土の中の根に蟲がつけば、幹も枝も葉も皆枯れなければならぬ。國といふ大木にはいろ〳〵の枝がある。商業もその一の枝である、工業もその一の枝である、軍隊もその一の枝である、學問工藝等皆それ〴〵に別の枝を成して居る。而も其等が相集つて一の大木を形作つてゐるのである。その枝の一つばかりを榮えしむるといふことは出來ぬ。又何れの枝なりとも輕んずることは出來ぬ。何れか一つの枝に受けた損害が漸く全體に害を及ぼす場合も稀ではない。白樂天が東坡に花樹を植えた時の詩の中に、

小樹低數尺。大樹長丈餘。封植未幾時。高下齊扶疎。養樹既如此。養民亦何殊。將欲茂枝葉。必先救根株。云何救根株。勤農均賦租。云何茂枝葉。省事寛刑書。

といつて居る。是れは昔の王政時代に郡守が民を治むるに就て感じた所を詩にしたのであるから、其儘に今の世には當て嵌らぬけれども、その精神は今日の吾等も大に學ぶべきである。昔の郡守がやつた事を、今日は社會の各方面の人々が力を協せてやれば宜いのである。

根柢を養ふの道

白樂天が『農を勤めて』といつたのを、人々が互ひの努力を重んじあふことに解すれば宜い。『賦租を均くす』といつたのを、不義不正が許されず

不公平な事の行はれぬ世の中にすると解すれば宜い。『事を省て』といふは殊に必要なことである。世の中は然に複雜になつて行くものであるから出來得る限り事を省き、各自の心に餘裕を作るやうにしなければならぬ。つまらぬ例を取るやうであるが、東京あたりの商人の店で折々景物といふものをくれるが、余はいつでも斯んな愚なことは無いと思ふ。商賣は慈善事業ではないから、損をして物を賣るといふことは無いであらう。さうすれば景物に費用をかけるだけ、商品が高くなつて居るのは當然のことである。それよりも景物をくれるだけ商品の値を下げて賣つてくれるならば、買ふ方も都合がよいし、賣る方も手數が省けるわけである。然るに商店の數が多くて競爭が烈しいために、一方で景物を出して客を呼ぶと、他の方でも負けずに景物を出し、互ひに餘分の手數をかけて居るのである。若し凡ての店で皆景物を出さぬことになれば互に助かるのであるが、その斷行がむづかしいと見える。是れは唯だ一の例として引いた迄のことであるが

景物的の仕事

凡ての人の仕事に景物的の仕事が多いと、その本業の方に全力を注ぐことが出來なくなるのである。然るに今の吾が國などは此の景物的の仕事が頗る多いので、大部分の人の力が空費され、何事も實績の擧がらぬのは困つたことである。

高い地位に立つ人が其の地位の安全を保つために、人氣を取ることに苦心する。低い地位に在る人は其の地位を失はざらんが爲に、上に立つ人の意を迎へやうとする。之が爲にいろ〳〵の骨折りをするのである。又同輩の間に煩はしい競爭が起り、甚しきに至れば相排擠しあふにも至るのである。斯ういふ事に多くの力を費し、多くの時を費すために肝要な仕事は更に進捗せぬといふ有樣で、全くこれは景物の禍といふべきである。孔子の弟子に言偃といふ人が武城の宰となつた時に『人を得たるか』と孔子に問

景物の禍

はれて、

澹臺滅明なる者あり、行くに徑に由らず、公事に非れば未だ嘗て偃の室に至らず。

と答へた。行くに徑に由らぬのは人に隱れて歩く必要が無いからである。公事以外に長官の室に入らぬのは自ら求むる所が何もないからである。此の滅明の如きは一切景物的の仕事をやらなかつた人と見える。余は東京驛のプラットホームが常に送迎の人で繁昌して居るのを見て今の世に澹臺滅明の少いことを痛歎せざるを得ぬのである。又相當な地位に在る人が旅行する時などを見ても、ゾロ〳〵とお伴を多く連れて居るのに驚かされる。連れて居る人は之によつてその威勢を示さんとし、連れられて歩く者は之によつて恩顧を繫がんとする、何れも景物的の仕事である。此等の事の爲に迷惑を蒙るものは大多數の國民である。

社會制裁の必要

此の如き弊がいつ迄も除かれぬといふは要するに、社會に正義が行はれて居ない證據である。人の心の力も身の力も共に限りがあるから、つまらぬ事に努力をすれば、當然爲すべきことに力が注がれずして、凡てを宜い加減で濟すといふことになる、それが世の中で許されて居て、何等の制裁も加へられぬために弊害は日に長ずるばかりである。社會を健全に發達せしめやうとするには、人々の努力が無意味の事に注がれぬやうにしなければならぬ。『事を省く』といふのはその事である。必要なことにまで省略を加へよといふ意味ではない。此事は嚴格なる社會制裁と相俟つて初めて行はるべきことである。若し社會制裁が弛んで居れば、如何なる事をしても法律に觸れさへしなければ宜いといふことになる。白樂天の詩に『刑書を寬にす』とあるのは深い意味がある。刑罰を寬にしても世の中が治まつて行くのは、刑罰よりも一層力强い制裁が行はれてゐるからである。

商鞅の實例

至て舊い話であるが秦の商鞅の事蹟は大なる敎訓を吾等に與へる。その事は舊くても其の敎訓はいつも新しい。商鞅は秦の孝公の信任を受けて國政を委ねられた人である。彼は新に法令を作つて世に行はうとしたが、先づ一般人民に法の威嚴を認めしめなければならぬと考へ、國都の南門に三丈の木を立て、『之を北門に移す者には十金を與へん』と告げたが、その實行を危んで誰も應ずるものは無かつた。そこで更に令して『之を移すものには五十金を與へん』といつた。一人あつて之を移したところが直ちに、五十金を與へて欺かざることを明にした。それから新しい法令を施行したが、暫くすると太子が法に觸るゝやうな行ひをした。其時に商鞅は『上の人が法を犯すから法が行はれぬやうになるのである。しかし太子を刑に處するわけに行かぬから、その傅たる者に刑を加へやう』といつて太子の傅公孫賈を刑に處した。此より法令能く行はれて、漸く富國强兵の實を擧げ

得るやうになつた。然るに其後孝公が死んで太子が立つに及んで、商鞅は忽ち信任を失つてしまつた。それに久しい間彼の橫暴を憤つて居た人々の讒言が加はつたので、彼は謀叛人として逮捕されることになつた。彼は身を全うせんが爲に逃亡し國境に至つて一宿せんとしたところが、『國法として手形の無いものは泊められぬ、若し泊めれば重い罪に處せられる』とて何處でも拒絕せられた。玆に至つて商鞅は『嗚呼法を爲すの弊一に此に至るか』と歎息したが既に遲かつた。彼は終に身を置く所が無くて殺されてしまつた。法の力で何でも出來ると思つたのが彼の誤りである。法は正義に立脚しなければならぬ、正義に立脚せぬ法は法たる價値を有せぬものである。三丈の木を南門より北門に移したといふ小い勞力に對して五十金を與へるといふことも、爲政者として出來ぬことではない。しかし此事は正義と一致せぬものである。人の勞力と報酬とは相伴はなければならぬ筈で

ある。然るに法の威力を示すために小い勞力に對して大なる報酬を與へるのは『力は正義よりも强い』といふことを一般の人に敎へることになる。何事も力づくで行けると思つた商鞅が力を失ふと共に禍にかゝつたのは、後世によき訓戒を與ふるものといふべきである。

法は常に正義を護るものでなければならぬ。法の力を假りて無理を通すといふことが出來れば、國中の人は皆不安の念を脫することを得ぬであらう。佛敎に於ては國王の恩といふことを屢々說くのであるが、それは國王が正義の保護者であることを前提としての話である。故に或は、

佛敎と王者

王者は民の父母なり、能く法に依つて衆生を攝護し安樂ならしむるを以ての故に、之を名けて王と爲す。……王者の立つことを得るは民を以て國を爲せばなり。民心安からざれば國將に危からんとす。是故に王者は當に常に民を愛すること母の赤子を念ひて心に離れざるが如くすべし。

——尼乾子經

と說き、或は國王として重んずべき五事を擧げて、

一には萬民を領理して枉濫あることなし。二には將士を養育して時に隨て賞與す。三には善法を念じて福德を絕たず。四には忠臣正道の諫を信ずべし。五には欲貪の樂みを節して心を放逸ならしめず。——法句譬喩經

と說いてあるのも、畢竟王をして反省の大切なることを忘れしめまい爲である。されば又

法行を行ずるの王は自在を得と雖も非法を行はず。——尼乾子經

と直言したのもある。儒敎に於ても正義に基いて法を運用すべきことを敎へ、法の力を萬能と考へることを常に戒めて居る。孔子が『之を道くに政を以てし、之を齊しうするに刑を以てすれば民免れて恥無し』といつたのは有名の語である。書經の中に皐陶の語として、

儒敎と政道

下に臨むに簡を以てし、衆を御するに寛を以てす。……罪の疑はしきは惟れ輕くし、功の疑はしきは惟れ重くす。其れ不辜を殺さんよりは寧ろ不經に失せん。――大禹謨

とあるも此の同じ精神から出たものと思はれる。此等の事を思ひ合せて白樂天の詩の『刑書を寛にす』といふ句を解すれば、大に意義があるやうである。

社會制裁の意義

法律上の制裁をあまり勵行せずして、安穩平和な生活が送れる爲には、社會的制裁が充分に行はれて居なければならぬ。否、法律の制裁といふものも畢竟社會的制裁の一種と見るべきである。何となれば法律なるものは畢竟するに社會の意志を代表するものでなければならぬからである。社會よりして正義を壞つた者に制裁を加へるのは、決して其人に強いて壓迫を加へんとの意に出るものではない、實は其人を一の人として重んずる所から起つて居るのである。前の章でもいつたことであるが、凡ての人は皆『自由の人』として見られなければならぬのである。『自由の人』といふ意は自由選擇の出來る人といふ意である。人の行爲は其の意志の現はれたものであるが、意志とは選まれたる欲求のことである。幾つかの欲求が同時に起つてゐる時に、その一を選擇して實行するのであるが、その何れを選擇するも其人の自由である。自ら選擇したる所を行ふのであるから、善いも惡いも皆其人自身に於てその責を負はなければならぬのである。若しその選擇が誤つた爲に惡い結果を生ずるならば、それに相當したる制裁を受けるのは固より覺悟したる所でなければならぬ。他の人が遠慮して之に制裁を加へぬといふのは、その人の行爲を自由選擇の結果と認めぬことになるのであるから、結極其人に對する侮辱となるわけである。

但し世間は複雜であるから全く思ひがけぬ出來事も起つて來る。又自然

界の事には吾等に豫想もつかぬ變化が起るものである、例へば地震とか暴風雨とか其外種々の事變が不意に起るのである。斯ういふ事のために豫定が全く狂つたのに對しては責任を負ふに及ばぬと、一般に考へられて居る。それで『不可抗力』などゝいふ語もある。但し不可抗力といふ語が往々にして一種の遁辭として使はれるのは困つたことである。たとへ地震とか暴風雨とかいふものは不可抗力であらうとも、その事變に處する際に於て其人々の價値が明かに示さるゝものである。自己の責を果さんが爲に全力を盡して、それで不可抗力に負けたのなら已むを得ぬことであるが、其の事變に處する自己の用意と決心とに於て缺くる所がなかつたかと充分に反省しなければならぬことである。前に引いた諸葛孔明の出師表に『成敗利鈍に至りては臣の明かに能く逆め覩る所に非るなり』といふ語があるが、これはその前に『臣鞠躬盡瘁死して後已まん』といふ語があるのと、相俟つて

不可抗力といふこと

初めて意義を有するのである。唯だ『結果はどうなるか分らぬ』といふのでは全く無責任である。これは人事上の問題であるが、天變地夭に處するにも同じ心懸けでなければならぬ。大洋を航する船が暴風雨によつて沈没する時に、乘客の救護に出來るだけの力を盡し、自己は船と共に沈んだといふ船長の話を聞いて感激せぬものはあるまい。殊に先年潛航艇に殉して死んだ佐久間大尉の如きは、日本の軍人の貴い精神を遺憾なく發揮したものといふべきであらう。自己の最期の目前に近づくを知つて少しも慌てず騒がず、最善の處置を盡し、其上に後の參考となるべき事を出來るだけ精密に書き殘し、而も自己の注意の足らなかつたことを謝して從容と死に就いたといふは、眞の勇士の爲す所である。攻城野戰に於て赫々たる武勳を樹てるよりも遙かに難くして、又遙かに貴い事である。凡ての人に佐久間大尉の如き心をもつことを望むのは無理であるけれども、斯ういふ人も

佐久間大尉

世の中にはあるのだといふことをよく考へて、言を不可抗力に托して責任を回避することを愼まなければならぬと思ふのである。

武士の責任觀念

各自の行爲は各自の意志の現はれたものである、その意志の決定は各自の自由であるが故に、その行爲に對する責任も各自が負はなければならぬのである。自己の行爲に對して責任を負ふといふことは眞に貴いことである、人の人としての價値は斯くして充分に發揮し得らるべきである。吾が國の武士道に於ては此の精神が大に尊重せられたものである。元龜三年十二月遠州三方ヶ原の戰は甲州の武田氏が當時遠州濱松に居城を搆へて居た德川氏に對して壓迫を加へたもので、此の戰に於て德川方は大敗したのであるが、しかし三河武士の健氣さは此の敗軍の際に於て最も明かに現はれたのである。彼等は目に餘る敵の大軍に當つて少しも恐るゝ所なく、味方が算を亂して斃るゝのを見ても一人として敵に後を見せるものは無かつた時に大將の德川家康は三十一歳の血氣盛りであつたので、多くの將士を殺して自分ばかり生命を全うするのは忍び難きことであると考へ、討死の覺悟を以て敵軍の眞中へ突進せんとした。多くの者が諫止したけれども家康は聽かずして馬を進めた。時に夏目某といふ槍術に秀でた勇士があつた。彼はッカ〳〵と出て來て家康の乘つた馬の口を取り、力任せに濱松の城の方へ引き向け、手に持つた槍をあげて馬の尻を續けざまに打つた。馬は驚いて飛び上り、城の方へ向つて一散に走つたので、家康は無事に城中へ入ることが出來た。その時に夏目があまり熱心であつたので、馬の尻を打つた槍が家康の兜の鍬に當つて恐ろしい音を立てた。夏目は主君の無事に城中に入る後影を見送つて、『いかに危急の際とはいひながら、主君に對して槍をあげて打つといふは申譯もないことである。殊に御兜の鍬に當つたのは何とも恐れ入つたる次第で、御詫の申上げやうもない。此上は討死して

此罪を償ひませう』といひ、直ちに敵軍の中へ突き入り槍の柄の折れるまで戰つて討死をしたといふ。實は夏目の働きによつて家康は生命を全うしたのである。然るに夏目は少しもその功に誇らず、却て自ら主君に不敬を働いたといふ點に就て大なる責任を感じ、死を以て之を償つたのである。此等をこそ武士道の精華と稱すべきである。

責任觀念の強い人ほど立派な武士として重んぜられたのである。それ故に何か過失をしたものは、自ら生命を捨て其の過失に對する謝罪の意を表し、周圍の人も敢て之を妨げず、その人をして武士の面目を全うせしむるやうに力を添へてやつた。是れは實説では無いかも知れぬが、口碑に傳はる所によると天保の頃薩摩の藩士某といふものが外出の途中蕎麥屋に立入り、一膳の蕎麥を食し終り勘定をしやうとして、懷中物を忘れて來たのに氣がついた。其時のフトした出來心から側に居た町人の財布を盜んで勘定をすませ、家に歸つて來たものゝ良心の呵責に堪へかね、友人の某を呼んで事情を打明け、介錯を賴んで切腹して果てたといふ。僅かの錢のために生命を捨てたのは愚の至ともいふべきであるが、一旦その罪に氣附いては其儘にすまされぬといふのが武士の武士らしい所である。默つて居れば其儘にすんでしまふべき所を、友人に對して懺悔し、自ら切腹して罪を償つた。その友人も亦た敢て之を止めず、彼をして自ら制裁することによつて武士の面目を保たしめた。その自己制裁を認めたのは即ち其の人格を尊重し、たとへ一時の迷ひから罪を犯したにもせよ、心の底まで腐つた者ではないといふことを承認することであつたのである。

自己の過失に對して自ら制裁を加へることを知つて居る人のみならば社會に多くの面倒は起らぬけれども、それは凡ての人に望まれぬことである。されば社會の正義を壞り、他人の權利を侵して敢て憚る所なきものには、

社會制裁は其人を救ふため

社會の制裁を加へる必要が生ずるのである。たとへ地位あり身分ある人でも、或は名譽を有し財產を有する人でも、不正の行爲をしたものは、誰も相手にせぬやうになり、世間との交際が出來ぬといふやうに社會制裁が嚴しければ、不祥なる出來事の續出するといふやうなことは決して無いのである。社會制裁は其人を苦しめんが爲ではなく、其人を救はんが爲に加へらるゝものである。即ち彼をして自ら反省してその罪を悔い、正しき人であつた昔の彼に立返らせんが爲に之に制裁を加ふるのである。即ち涅槃經に『慈無くして詐り親むは是れ彼が怨なり』といひ、『彼が爲に惡を除くは即ち是れ彼が親なり』とある精神を以て制裁を與へるのが眞の制裁である但し社會制裁の中に報復的の卑しい感情の交つて居る場合が往々にしてあることを注意しなければならぬ。斯樣の場合に於ては眞の制裁の意義を失ふのである。例へば或る富豪がその私利を遂げんが爲に議員を買收し、社會公衆に不利益なる議案を議會に提出せしめたとすれば、之に對して或る制裁を加ふるのは當然の事である。それは飽くまでも正義を擁護せんが爲と、彼の富豪をして自己の非を反省せしめんが爲でなければならぬ。若し其際に平生彼の榮華の生活に對し嫉妬心を懷いてゐた者の復讐的の考へが混じて居たとすれば、それは正しき意味の制裁ではなくて、多數によつて行はれたる不正の行ひとなるのである。

刑罰の必要

正義を壞つた者に對する制裁が更に具體的なものになつたのが刑罰である。刑罰は强制的に加へらるゝのであるから、若し之を强制する力が缺けて居る時には全く行はれぬのである。不正を行つた者に强き反省を促し、又その不正の行爲が社會に傳播することを防ぐためには、具體的なる刑罰を行ふ必要が生じて來るので、刑罰はまことに已むを得ざる處置である。刑罰といふことが存在して居るのは、不完全なる現在の社會に於て、正義

の行はれんことを熱望する結果と見るより外はない。刑罰の必要の無い時代が早く來るやうにといふ希望を以て、已むを得ず刑罰を行ふのである。

刑は刑無きを期す。――書經、大禹謨

といふは至言である。刑罰に就て最も舊い、又最も有名なる傳說は、アダム夫婦が禁制の果を食つた爲に樂園から追はれたといふ事であらう。『神は卽ち愛なり』といふ考へからいへば、罪を犯したものを憐みもせずして嚴しい罰を加へられたのは神らしくない仕方であるともいはれやう。しかし罪を赦して制裁を加へぬのは、その罪を罪ならずとして許容することになる。之を罰して反省せしめ、自ら救うて、自ら其の幸福を回復すべき途を講せしむるのが眞の愛であるといふ解釋も出來るのである。

兎も角も現在の不完全なる社會に於ては刑罰の必要を認めぬわけには行くまい。勿論罰せらるゝ人が惡いには相違ないが、罰する人も決して完全

ではない。そこを充分に顧慮しなければならぬ。刑罰は强制的に加へらるゝものであるから、之を加ふるに當つて過失の無からんことを充分に注意しなければならぬので、前に引いた書經の文に、罪の疑はしきは輕くせよといふことのあるのも、畢竟此意に出るものであらう。世說新語に『刑を設くる者は輕きを厭はず』といふ語もある。重きにすぐるも輕きにすぐるも共に不可であるが、輕きにすぐる害の方が寧ろ少い所から、斯ういふ說も起るのである。刑罰を加へる爲にいろ〳〵の條文を設けるのも、畢竟刑罰を行ふ人の私情に絡まれて公正を失ふことを防ぐ爲である。されば若し其の條文に囚はれて、罪を犯したる事情の眞相を明にすることを怠るならば非常なる弊を生むものである。刑罰は刄物であるから、腕の鈍いものや頭の狂つたものに使はせては非常に危い。

獨逸のレッシングの作にかゝる戲曲に『エミリヤ・ガロッチイ』といふ

エミリヤガロッチイ

のがある。（森鷗外氏の譯で、『折薔薇』といふ名にして明治二十三四年頃世に公にされた）オドアルドー大佐の娘エミリヤは絶世の美人であるが、ガラタルラの殿が之に戀慕し、殿の暱近のマルネルリイといふ者が殿の意を迎へんために種々の奸策を廻らし、エミリヤと其の許嫁の中なるアビヤニィ伯との間を隔てやうとする爲に種々の事件が起る。終にエミリヤは死を決し、父のオドアルドー大佐も其心を察して、自ら劍を拔いて之を刺殺す。娘は『風の散らさぬ間に花を折つてくれたのである』と喜んで死ぬ。そこへ殿が出て來て驚く。大佐は劍を殿の脚下へ投出し、

こゝに私の犯罪の證據品がございます。私はこれより自訴いたして、入牢を願つて見まするつもり。私はあなたの御裁判を仰ぐつもりでございます。そしてあそこでは（と天を指し）あそこでは神樣にあなたと私との間のおさばきを受けませう。

といふ。殿は歎息して、

あゝ天道樣、人の主人になる者がやつぱり人であるばかりに、どれ丈難儀をする者があるか知れませぬ。それに何で又惡魔のやうな奴が來て、その友達に迄なりますることもやら。

といふのが全篇の終りである。實際大佐は殺人罪を犯したのであるから法律の制裁を受くべき者である。その殺人の原因は殿の戀慕にあるけれども殿には法律の制裁は加はらぬのである。しかし天に於ての審判では、それが轉倒するであらうといふのが作者の見る所である。刑罰の事にたづさはる者は、常に此等の點に意を用ゐて居なければなるまい。

刑罰は復讐ではない。刑罰を復讐の如くに解した時代もあつたが、それは間違つた考へである。刑罰は罪を犯した者の心に向つて加へらるゝもので、其の罪の形に對して加へらるゝものではない。德川時代には『十兩以

刑罰の目的